地方都市物語・２・眠れない夜（冬・旭川へ）

asami

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
地方都市物語・２・眠れない夜（冬・旭川へ）

【Ｎコード】
Ｎ２２０２Ａ

【作者名】
ａｓａｍｉ

【あらすじ】
ある日、義兄ヒロから「仕事」の依頼が。
アリアは盗みに入るが、現金は持ち去られ、直後に姿を消す柚子。
柚子の過去を知ったアリアは、東昇と共に旭川へ柚子探しの旅に。
アリアと柚子の関係は？

1・朝の訪問

「さあ、できたわよ」
柚子は焼きたてのトーストを、アリアの目の前にある皿にのせた。
朝食を楽しそうに作る柚子を目で追いながら、アリアは食卓椅子に座って紅茶を口に含み、ぼんやりしていた。
まだ外は寒く、人恋しくなる季節。
いつもなら、ヒロからの連絡をじっと待つだけの孤独な日々が、こうも生活ががらりと変わるとはアリア自身、思いも寄らなかった。
柚子が来てから、この一ヵ月足らずの間に、以前には考えられないほどアリアは規則正しい生活になった。
朝は午前中に起きられるようになり、朝食もしっかり食べている。温かい食事を作ってもらい、一緒に食べられる相手がいる。そんなことがアリアにはとても嬉しかった。
他人と生活を共にすることによって、気を使ってしまい、生活は窮屈になると思っていたが、予想外に居心地が良いのだ。
あまり使用していなかったこの古ぼけたマンションで、柚子と二人、人並みの生活を送っていた。
「これは柚子のおかげかな」
アリアはトーストをかじりながら、ぽつりと独り言を呟いた。
一人の時意外は必ずかけていたサングラスも、柚子の前ではいつの間にかはずすようになっていた。
苦笑しているアリアを見て、柚子が首をかしげた。
「なあに笑っているの」
「いや、なんでもない」
柚子のペースに乗って気を許してしまった部分もあるが、まだ必要最小限の会話しか交わさないように用心はしていた。
『何を考えているのかわからない、危険な子よ』
アリアは女怪盗Dが言っていたその言葉がずっと引っかかってい

た。
短期間であるが、柚子と生活していたことのあるDの言葉は重い。
泥棒の弟子になりたいといっていたが、柚子は他に何か目的があって近づいてきたのだろうか。
だが、柚子は今のところおとなしく、高校にも休まず登校し、平穏な日々が続いていた。
ただ一つ、例の双子が気軽にマンションへ出入りするようになってしまったことがアリアの悩みの種だった。
「ねえ、サングラスをはずしたんだから、私の前では男の姿じゃなくてもいいんじゃないの？」
柚子は、洗いざらしの白いシャツにパンツスタイルのアリアを眺めて言った。
柚子が来る前から一人でいる時もこんな服装だった。アリアは男として長く生活してきた。もうそれは自分でも違和感がなくなっていた。
「別にこれが普通だから。それに、訪問者がいるでしょう。厄介な……」
「来たぞ」
噂をすれば、今日もコートを着たままどかどかと東昇（あずまのぼる）が部屋に入ってきた。
「昇！　勝手に上がりこむな」
アリアはそう言って、慌ててサングラスをかけた。
「良いことだろう、こうやって未然に犯罪を防ぎにきているんだから」
昇はわけのわからない理屈を言うと、食卓テーブルの椅子に座り、アリアからトーストを横取りした。
「あっ、また！　ただ朝食をたかりに来たんでしょう！」
アリアは仕方なく柚子から別のトーストをもらった。
「硬いこと言うな」
昇は紅茶までもらい飲んでいた。

「ここのところ毎日ここへ『出勤』してくるじゃない。暇なのね、探偵って。あ、昇が暇なだけか。それともさぼり？　刑事さんは忙しいのね、十無は滅多に来ないもの」
「柚子まで俺達を呼び捨てか」
昇は柚子の嫌味には動じず、目上の者を呼び捨てにしているということにこだわって、ぶつぶつ文句を言っている。
「そんなこと言うなら、もう鍵は開けてあげない」
「いいじゃないか、賑やかな方が食事も美味しいだろう？」
昇はまた無茶苦茶な論理だ。
「そうねえ、昇がいると確かに賑やかだわ。アリアって無口で、外出しない時は自室に閉じこもっていることが多いから」
柚子は妙に納得している。
「へえ、お前って根暗だな」
昇が興味深そうに言った。
「柚子、余計なことは言わない」
アリアは柚子といるとつい何でも話してしまいそうで怖かった。柚子は人の話しを聞き出すのがうまい。
だからアリアは極力、自分の部屋にいるようにしていたのだ。
「だって本当だもん。ねえ、昇が来たらアリアも楽しそうよね」
「そんなことはない、毎日煩わしい！」
慌てて否定したが、柚子にそう見られていたのかと思うと、アリアは何故かどきりとした。
毎日がこんな調子で穏やかだった。
が、そんな平穏な日々は長くは続かなかった。
真夜中、午前二時過ぎ。ベッドサイドに置いていたアリアの携帯電話が鳴った。
「俺だ、明日の十三時に会いたい」
「ヒロ、何かあったの？」
「いや、これからことが起こる。手伝いを頼む」
「……わかった」

アリアは電話を切ると、ため息をついた。
いつだろうと有無を言わさずヒロが指示を出すのだ。
真夜中の電話も、もう慣れてしまい、アリアは寝ぼけることもなかった。それはいつものことだったが今回は何かが違っていた。
アリアの胸の中に冷たい風が吹き抜けていく感覚が沸き起こった。
柚子とはたいした会話はなかったが、それでも誰かと一緒に生活しているという安堵感があり、居心地が良く、アリアは徐々にこの環境に慣れつつあった。
平穏な生活に暖かい食事。そのありがたみをアリアは改めて知ったのだった。
「健康的な生活にバイバイかな」
そう諦めたように呟くと、アリアはガウンをはおってキッチンへ行き、戸棚の中を物色した。
「確かヒロが前に置いていったウイスキーがあったはず」
目当てのものを戸棚の奥から見つけ、ロックグラスに半分ほど注いで、半分ほど一気に飲んだ。
「アリア？」
眠い目をこすりながら柚子が部屋から出てきた。
「ああ、ごめん起こしてしまったか」
「どうかしたの？」
「別になんでもない。目が覚めてしまって。寒くて眠れなくなっただけ」
ウイスキーを一口飲んでから、居間のソファに座った。
「それ、ストレート？」
「そのほうが眠れそうで」
アリアはグラスを持った手で眉間を押さえた。
「止めなよ、そんなにお酒に強くないんでしょ？」
柚子が隣に座って心配そうにアリアの顔を覗き込んだ。
「前はすぐ眠れたのに。この不安な気持ちは何だろう」
柚子の優しく見つめる瞳に包み込まれるような安らぎを感じ、酔

いも手伝ってか、アリアはつい弱音を吐いてしまった。
「不安？」
「そう、今までにない落ち着いた毎日に慣れてしまったからかな」
「どういう意味？」
そう問われて、アリアは少しためらったが、気がつくと、自分のことを話し始めていた。
「ずっと、安らげる家というものに無縁の生活だった。……物心ついたときから両親は私の存在を否定しているようで、私はずっと一人だった。私は誰からも必要とされてないと感じていた」
「私はてっきりアリアって何不自由なく過ごしてきたんだと……」
「どうして？　そんなふうに見えた？」
「なんとなく」
柚子が口ごもった。
「……そんな中でヒロだけが私を支えてくれた。母が離婚後、私を連れて家を出たけれど酷い生活で……ヒロが私を母のところから連れ出してくれて一緒に生活するようになり、やっと精神的に安定できた。でも、ヒロは突然いなくなって暫く帰らないことがよくあって」
「何処へ行っちゃうの？」
「多分、女の人のところ。そんな時は、もう私は必要なくなって置き去りにされたのか、私が何か気に障ることをしたからではないかと自分をよく責めていた」
「ヒロって酷い」
「ヒロは悪くない。私が勝手に頼っているだけだから。最近は別々に住んでいるし。でも、そんな生活に戻りそうで怖い。ヒロの顔色を伺って振り回される生活。……変なことを話したね。聞いてくれて有難う。少し気持ちが落ち着いた。柚子といると、なんていうか……休まる」
アリアは一気に話し、照れくさくなったのをごまかすように笑った。

今までヒロ以外に心を許したことはない。だが、柚子に見つめられると穏やかな気分になった。それは丁度、教会の神父に懺悔を聞いてもらうような感覚に似ていた。
不思議な存在の柚子。彼女はアリアにとって特別な存在になりつつあった。
「実は……Dに柚子のことを警戒しろと言われていて当たり障りのないこと以外話さないようにしていた」
柚子の反応を見ながら、アリアは少し話しづらそうに打ち明けた。
「それで今まで無口だったのね」
「……柚子のこと話してくれないかな」
「アリアみたいに打ち明けるような過去はないわ」
「私に近づいたのには何か目的があるんでしょ？」
「だから、お弟子さんにしてって言ったじゃない」
「ほんとにそれだけ？　ヒロが多分、柚子のことを調べている」
「何を？」
柚子の顔が一瞬険しくなった。
「まだ聞いていないからよくは分からないけれど」
アリアはウイスキーを一口飲んだ。
柚子は足元に目を落とし寂しそうに「そっか」と呟いた。やはりヒロが言うように、何か目的がありそうだ。
「悪い娘じゃないよね、少なくとも私はそう思っている」
時期が来たら柚子はきっと打ち明けてくれる。そう信じてアリアはそれ以上深く問いたださなかった。
「ありがとう。でもそんなに簡単に人を信じちゃだめ」
柚子はくすっと笑ってアリアを見た。
「何がおかしいの？」
「だって、そんなこと言われると思っていなかったから、嫌われているのかなって」
「ごめん、誤解させたね」
「やさしいね、アリアは。あの……ヒロとは縁を切ったほうが良い

よ」
「なに？　柚子まで」
「他の誰かにも言われたことあるの？」
「昇に言われた」
「探偵に？　相当アリアにまいってるのね」
「そんなんじゃない」
アリアは慌てて否定した。
「ふうん、あの二人に女だって言ったら？」
「別にどっちでも良いじゃない」
「きっと、十無と昇には重大なことだと思うけれど」
柚子はニヤニヤしている。
「からかわないで」
「ほんとのことだもん」
「そんなの、別に重大なことじゃない……」
アリアは自分の動揺している気持ちを悟られまいと、残りのウイスキーを飲み干した。
結局、二人は朝方近くまでたわいのないことを話しこみ、いつの間にかそのままソファに座ったまま眠りについたのだった。

「ア、アリア、お前達何を……」
翌朝、いつものように昇が来たのだが、二人がソファで互いに寄りかかったまま眠っているのを見て、その場に立ち尽くした。
「あれっ、昇？」
アリアは昇の声で飛び起きて慌ててサングラスをした。
「ああ、おはよう昇。今日はまだ朝食を作っていないの」
欠伸をしながら立ち上がって柚子がだるそうに言った。
「お前、高校生と……」
「あーっ！　昇、今やらしーこと想像したでしょ」
柚子は昇に近づき、じっと顔を覗き込んでニヤニヤした。
「いや、その」

昇はしどろもどろだ。柚子は昇のそばに行き、アリアには聞こえないように耳元で囁いた。
「でも、アリアとだったら私は別にかまわないけれどね」
「馬鹿を言うな！」
昇は動揺したのか声が大きくなった。
柚子が余計なおせっかいをしたのではと思ったアリアは、「なにを言った？」と、柚子を睨んだのだが、柚子はアリアに意味ありげにウインクをして、今度はアリアに近づいて耳打ちした。
「わざと玄関の鍵を開けておいたの」
「どうして？」
「昇がどんな反応をするのかアリアに見せてあげようかなーと思って。これで分かったでしょ」
「何が？」
「鈍いわねー」
「おまえら随分仲が良いな」
昇は面白くなさそうだ。
「そうかな？」と、アリアと柚子は口を揃えて言った。

2・仕事

柚子がゆっくりと遅い朝食を摂り、悠々と遅刻して学校に行った後、アリアはヒロに会うために慌てて化粧をして女性の姿になり、指定場所へと向かった。なんとか時間ぎりぎりに間に合うことができた。

「折角急いできたのに、遅い」

しかし、ヒロは現れず、待ち合わせの時間より三十分が過ぎていた。百貨店に併設された喫茶店は平日の昼下がりとあって、女性客ばかりだ。

紅茶のおかわりを頼もうかと迷っているところに携帯電話が鳴った。

「ヒロ？　どうしたの」

「わるい。もう着くから店を出て待っていろ」

アリアがすぐさま歩道に出て、行き交う車を見ていると、目の前に一台のタクシーがとまった。

「乗れ」

「急ぐの？」

アリアが助手席に乗ったと同時にタクシーは乱暴に発進した。

ヒロは顔を隠すための帽子をかぶらず、肩より長い癖毛の髪を無造作にひとつに束ねているだけだった。サングラスをかけていたが、背丈百八十センチほどのヒロが、街中を歩くには目立つ格好だった。

「つけられてはいなかったか？」

「刑事はいなかったし、大丈夫だと思う」

宛てもなく、ヒロはただ闇雲に車を走らせているようだった。

「用心してくれ。……まずこの男に会って家に上がりこめ。そして俺を誘導しろ」

ヒロは運転しながら、唐突に『仕事』の話しを切り出して一枚の写真をアリアに渡した。

アリアはそこに写っている若い男に目をやりながら「盗むの？」と

聞き、不安な気持ちでヒロを見つめた。
「大丈夫だ、通報はされない。そういう金だ」
「そう」
今回も嫌だとは言えなかった。ヒロの指示はアリアにとっていつも絶対だ。
ずっと、ヒロの気に入るようにしてきた。反発しようなどと考えたこともない。
だが、この頃はこの生活がいつまで続くのかと不安になる。
「柚子はまだいるのか？」
「うん、ちゃんと学校にも行っている」
「早くあのマンションを出ろ。柚子がいると厄介だ」
「別に差し支えないし、いい娘だよ」
「騙されるな。あいつはあのDの獲物を簡単にピンはねしていたんだぞ」
「この前のダイヤだけじゃないの？」
「高校生が一人で渡り歩ける世界じゃないが、柚子はやっている。どういうことかわかるな？　あいつは普通じゃない。それに……」
「何？」
「いや何でもない。とにかくこのままでは危険だ」
「でも」
アリアは反論したかったがうまく言えずに言葉を濁した。
午後五時に帰宅したが、柚子はまだ帰っていなかった。アリアは余計な心配をさせないですんだことにほっとした。
今夜、ターゲットである柏木充（かしわぎみつる）と会い、自宅へ一緒に行くように仕向けなければならない。
アリアは昼間とは違う少し濃い化粧に、ヘアウイッグもロングに変えてタイトスカートをはいた。
時間には少し早かったが、遅くなるからと言うメモを残してフェイクファーのついたコートに身を包み、マンションを出た。

「ねえ、俺達だけ違う店に行かないか？　いい店を知っているからさ」
ヒロの調べ通り、柏木充は軽い奴だった。結婚式の二次会にもぐりこみ、席を隣にするだけで向こうから誘ってきた。
「そうね、私もここには知っている人があまりいないし、どうしようかな」
「絶対気に入るって。夜景が綺麗でさぁ」
「じゃあ、行こうかな」
柏木は親の会社を継ぐべき立場にあるが、付き合いだと言っては遊び歩いていた。
親も半分諦めているようで、二十代で遊ばせておけばそのうち落ち着くだろうなどと甘い考えを持っているとヒロが言っていた。
「でもなんだか酔ったみたい、もうきっと飲めないわ」
「えっ、もう帰るの？」
「少し休んだら大丈夫かも」
居酒屋を出てからアリアはよろけて柏木にもたれかかり、上目使いで顔を見上げた。
「じゃ、じゃあこの近くで休んでいこうか」
「ホテルは嫌いなの、あなた一人暮らし？　あなたのうちに行きたいな」
「で、でも」
「彼女とか誰かいるの？」
「い、いやいるわけがないじゃないか。親と住んでいて、でも今日はいないから」
柏木には親公認のフィアンセがいて、結婚式の日取りも既に決まっている。勿論、ヒロからこのことは聞いていた。
二人はタクシーを拾い、柏木宅へ向かった。
「あら、素敵なおうちね」
柏木と腕を組んだまま前庭を歩く。都心なのに、郊外に建っていると錯覚しそうなくらい、和風の家を木々が囲んでいた。

「なんだか冷たい風に当たったら酔いが醒めたわ、もう少し飲みたいな」
　二十畳はありそうなリビングだった。
アリアは革張りのソファに座って足を組み、柏木に甘えた声でお願いした。
「はいはい、お姫様。水割りでいいかな」
ルックスはそう悪くはない男だったが、言うことがいちいち鼻についた。
「君に乾杯」
「ありがとう」
「古い映画の決め台詞だよな」
「物知りね」
それを言うなら君の瞳にだろう！　とアリアは心の中で突っ込みを入れた。
お酒が強い男の人が好きと言うアリアの言葉に乗せられて、柏木は何杯目かの水割りを飲み干した。
「なあ、いいだろう」
柏木はアリアに段々と体を寄せてきて、ソファの端まで追い詰められたアリアは、もう逃げ場がなかった。
とうとうアリアの腰に腕を回してキスを迫ってきた。
「ん、なんだか体が重いな」
柏木が突然額に手を当ててそう言ったかと思うと、そのままどさりとソファに倒れこんだ。
「ふう、薬がなかなか効かないんだもん、どうなるかと思った」
柏木は高いびきをかいて熟睡していた。
水割りに睡眠薬をそっと混ぜて飲ませたのだった。
アリアは用心深く部屋を出て人がいないのを確認した。目的の寝室を探すと、部屋は難なく見つけることができた。
居間に戻って防犯カメラのスイッチをオフにした。足早に玄関へ行きながら携帯を鳴らして直ぐに切り、ヒロに合図した。

「サンキュー」
アリアが玄関を開けると、ダークブルーのスーツにコートを着て伊達眼鏡をかけた、会社員風のいでたちをしたヒロが立っていた。
「大丈夫だったか」
ヒロは自分の家の様に、臆することなく廊下を歩いていった。
「うん、ヒロの調べ通り誰もいなかったよ」
「そうじゃなくて、キスくらいされたか？」
「ヒロ！」
アリアの顔がカーッと赤くなった。
「何かされたのか」
ヒロの顔が曇り、アリアの片腕をぐいっと掴んだ。
「何もされないよ」
酒を飲んでいるアリアは、その拍子によろけてヒロに体を支えられた。
「嫌なことをさせて悪かった」
ヒロはそのままアリアをぎゅっと抱きしめた。
「離してよ、急がないと」
そう言って、アリアはヒロの腕を離れた。
こんなときに！　ヒロって何を考えているのだろう。
アリアは動揺を抑えてヒロの前に立って足早に歩いた。
「冷たいな」
ヒロは文句を言いながら、アリアについてきた。
「多分あの部屋が寝室だと思うけれど」
二人はさっきまでアリアがいた居間を通り抜け、奥にある寝室へ向かった。
明かりをつけて寝室に忍び込んだ。ダブルベッドと化粧台、ウオークインクロゼットのドアが目に付く。ヒロは迷わずそのドアへ進んだ。
「セキュリティとか大丈夫なの？」
あまり用心していない素振りのヒロを見て、アリアは不安になった。

「多分な」
「そんな……」
　ヒロは計算づくなのか？　時折見せる無鉄砲さがアリアは怖かった。
クロゼットの奥にはブランド品などの鞄がぎっしり並んでいた。
「この鞄のどれかに入っているはずだ」
「って、これ全部確認するの？　二十位はあるよ」
「これ以上の情報はない、探すしかないな」
ヒロは端にある鞄から中を確認し始めた。アリアもそれに習った。
「時間かかるね」
「今日は柏木夫妻が戻る心配はないはずだから安心しろ」
「柏木充も今頃、いい夢でも見ているのかな」
アリアも少し安心して冗談を言った。
「あった」
　ヒロが開けた、かなり痛んだスポーツバックに『それ』は入っていた。二千万円位はありそうだ。
ヒロは持参してきた鞄に札束を手際よく詰め始めた。
ピンポーン。
インターホンが鳴り、二人はぎょっとした。
「私の靴、玄関に置いたままだ」
アリアはこわばった表情で言った。
いったい誰がこんな時間に。
時計は零時を回っていた。
ヒロはどう対応しようか迷っているようだった。アリアは瞬時に落ち着きを取り戻し「隙を見て家を出て」と言い捨てて居間へ行った。
再びインターホンが鳴った。
アリアが居間のモニターを確認すると、若い女性が映っていた。
「どちら様ですか」
アリアは家人のように対応した。
「あなた誰？　充がいるんでしょ、ドアを開けなさいよ！　女とい

るって電話がきたんだから！」
どうやら柏木のフィアンセのようだ。アリアは玄関に行ってドアを開けた。
「泥棒ネコ！　充を誘惑したのね！」
彼女はアリアを見るや否や、凄い剣幕で怒鳴った。
「あら、彼女いたの。充さんはそんなのいないと言っていたわ。でもちょうどよかった、困っていたの。お酒飲みすぎてダウンしているから介抱してあげて」
アリアはふてぶてしい態度でそう言った。その女は肩を震わせて今にも泣きそうだった。
だが、アリアをキッと睨みつけてから何も言わずに居間へと走っていった。
「酷いわ、充！　起きなさいよ。なんなの、あの女！」
そう言って泣きじゃくり、彼女は寝ている柏木を揺さぶっているようだった。
「柏木にはいい薬かな」
アリアは悠々と柏木邸を後にしたのだった。

3・疑惑

「おかしい」
ヒロがタクシーを運転しながら呟いた。
「確かに彼女、電話がきたと言っていた」
アリアは後部座席から身を乗り出して運転席の背もたれに寄りかかって、絶対に聞き間違いではないと付け足した。
「妨害されたのか」
「誰に？」
「柚子には言ってないのか」
「何も話していない」
結局、慌てた為に金は半分しか持ち去れなかった。
「柚子はもうマンションにいないかもしれないな」
「疑っているの？」
「あいつはそういう奴だ」
「そんなのわからないじゃない」
「最近、サツ以外の誰かにつけられていた」
「柚子とは関係ないよ」
「随分肩を持つな」
「だって、いい娘だ」
「お前は簡単に信用しすぎる」
「そんなことない！」
ヒロの決め付けるような言い方に、アリアはだんだん苛立ってきた。
「あいつのこと何も知らないだろ」
「ヒロは知っているっていうの？」
「柚子のせいで危うくDは捕まりそうになったこともある。故意にやったことだ」
「ほんとに？　でも何かわけがあるかも……」
「これは事実だ」

アリアは言い返せずに沈黙した。
「それに、……あいつはお前の母親を恨んでいるかもしれない」
「どういうこと？」
「きちんと調べたら話す」
ヒロはそれ以上のことを教えてくれなかった。
何があるというのだろう。柚子は過去に自分とかかわりがあったのだろうか。アリアは不安になった。

「ああ、まだ七時過ぎか」
アリアは早く起きる必要はなかったが目が覚めてしまった。
柏木邸の仕事を終えてから一週間が経っていた。
「習慣だけ残ってしまった」
　アリアは苦笑いを浮かべた。
あの日、夜遅くに帰宅するとヒロが言ったとおり柚子はいなくなっていた。
柚子が起こしに来ることはない朝。しんとした部屋が寒々しく見える。
無駄とわかっていても柚子がいた部屋をのぞいてしまう。
「元に戻っただけなのに」
からっぽになった部屋を見てアリアはため息をついた。
アリアはいたたまれなくなり、マンションの近くにある喫茶店に行った。モーニングセットを頼み、新聞をぼんやりと眺めた。
「あの事件は新聞には載っていないね」
不意に背後から声をかけられた。
　見上げると昇が微笑んでいた。
「なんだ、昇か。毎日ご苦労さん」
アリアはいつもの暢気な調子で言った。
「なんだはないだろう。あのな、……公の情報ではないが……」
昇はアリアの横に座ると、顔を近づけて声のトーンを落とした。
「十無から聞いた話しだが、ある資産家の屋敷で盗難があったよう

だ。被害届は出ていないが、周辺が騒がしくなっている。マルサがマークしていたらしいが、たぶん脱税の金がやられたんだろう。被害者宅は柏木というのだが」
昇の目は鋭く、アリアを観察している。
「ふーん」
アリアは新聞のほうを向いたまま、興味なさそうに生返事をした。
「柏木の息子が女連れで帰宅している。お前だろう？　」
「私？」
「柏木充は結婚式の二次会でその女と会っているが、調べても該当者がいないそうだ。何処かへ消えたってことだ。いや、もともとそんな女はいない」
「その女が私だと？」
アリアは苦笑しながら新聞をソファに置いた。注文したセットが運ばれてきた。
「確かな証拠はないが」
昇は腕を組んで反応を伺うようにじっとアリアを見据えて言った。
「刑事でもないのに随分熱心だね」
アリアは紅茶を一口飲んだ。
「十無に頼まれてね。それに俺も本当のことを知りたい」
「知ってどうするの？　被害届けもないんでしょ？」
「さあな、俺にもわからん」
「変なの、暇なんだね。そんなことばかりしていたら昇進できないよって十無にも言っておいて」
「お前に言われたくない」
昇は皿にのっていたトーストを一枚口にくわえると立ち上がった。
「あっ、また朝食を横取りした！」
「今日もここにいたということは、柚子はやっぱり帰っていないのか？」
昇は行こうとした足を止めてアリアの方を振り返った。
「ここには帰らないと思う」

「今回のことに関係があるのか？」
「……」
疑いたくないが、多分関係があるのだろうとアリアは思っていた。
「柚子のことも調べてみた。両親は既に亡くなっていて、結構な遺産があったようだな。その金目当ての親戚に引き取られたが、高校入学と同時に一人暮らしを始めている。お前との接点はわからなかった。何かあるかと思ったが」
「そう……」
「仲良かったからな、気を落とすなよ」
昇はうつむいてぼそぼそと照れくさそうにそう言うと、喫茶店を出て行った。
「変な奴」
昇なりに自分を心配してくれているのだろう。昇の不器用な優しさが嬉しかった。
アリアは自然と笑みがこぼれた。

今日こそはしっかり灸を据えないとならない。
東十無は胸の奥で燻っている感情をうまくコントロールできず、やり場のない焦燥感が込み上げていた。
最近の昇の行動は目に余るものがある。口を挟まないのをいいことに、好き放題アリアのところに入り浸りだ。
自分はなるべく関わらないようにしているというのに。
「何処へ行っていた？　またアリアのところか」
昇が署に顔を出したところに、待ち構えていた十無が人気のない資料室へ昇を引っ張り込み、厳しい口調で問い詰めた。
「そうだけど。あいつまた喫茶店で朝飯食ってた。柚子がいなくなってからあいつぼーっとしていて、変だぜ」
昇は十無の心配をよそに、アリアのことを開けっぴろげに心配している。
「被疑者と親しくするな。俺の立場がなくなる」

「あいつは悪くない。ヒロという奴にそそのかされているだけだ」
「更正でもさせようっていうのか」
「だめか？」
昇の目は真剣だった。
自分はこんなに苦労して、アリアとのかかわりを断っているのに。
十無はストレートに感情を表す昇が急に腹立たしくなった。これは嫉妬なのか。十無は湧き起こった感情に動揺した。こんなことを考えていてはだめだ。
「お前、事務所の仕事そっちのけでアリアのことを色々調べているようだな。音江のおやじさんが嘆いていたぞ」
「もう耳に入っているのか。仕事はしっかりこなしている。保護者面するなよ、兄貴といっても同い年なんだから」
「俺だって面倒みきれない。お前がしっかりしないから周りが心配するのだ」
「うるさいな」
「昇、いくら幼馴染の親がやっている探偵事務所でも限度があるぞ」
「わかってる、じゃあな」
昇はふいと出て行ってしまった。
「おい、何か用があって来たんじゃないのか？」
十無はやれやれと小さくため息をついた。自分と違い、直ぐ行動に移す昇が心配だった。
反面、羨ましくもあった。十無は刑事と言う立場上、踏み込んではいけないと言い聞かせて今まで自制してきたのだ。
だが、昇がアリアとかかわるようになってから穏やかでいられなくなっていた。
「俺も昇のことをとやかく言えないが」
十無は手に持っていた書類に目を落として苦笑した。
それはヒロについて調べ上げた調査書だった。

4・ヒロの告白

「今そこへ向かっている、もう着く」
アリアがソファでうとうとしていると、夜二十一時過ぎ、いつものようにヒロからぶっきらぼうな電話があった。
「ここへ？　まずいよ、今朝も例の探偵が来てこの前の仕事の探りを入れていった。違う所で待ち合わせを――」
「荷物をまとめろ、そこを引き払う為に行く。引越しだ」
「えっ、ここを離れるの？　でも柚子が帰るかもしれないし」
「まだ信じているのか？　無駄だ」
「でも……」
「その話は後だ、待っていろ」
ヒロは一方的に電話を切った。
急にここを出なければならないのは何故だろう。このまま柚子とは会えないのだろうか。
アリアは気が重くなった。
ヒロが到着するまでの数分間という短い時間が、長く感じられた。
「刑事達は張り込んでいないようだな。まさかこんな時間に堂々とここへ訪ねて来ることはないだろう」
「多分」
アリアをソファに座らせてヒロもその横に腰を下ろし、ヒロは表情の変化を伺うようにじっとアリアの顔を見つめた。
「毎朝あの探偵が来ているようだが一体何をしに来ている？　刑事に頼まれているのか？」
「……さあ、どうかな」
ヒロは探偵が出入りしていることを心配していたのか。そのくらいのことは別に生活に影響はないし、引越ししなくてもいいのにとアリアは思ったが、口には出せない。
もし嫌な顔をされたらと考えると、ヒロに逆らう勇気がなかった。

「あの探偵は朝食を食べていくだけで、あとは柚子のことを調べた結果を教えてくれたり、犯罪に関わるなとか説教はするけれど、害は無いと思う」
　精一杯の抵抗。最後のほうはだんだん声が小さくなった。
ヒロの顔が険しくなったので、アリアは怒られそうに感じたのだ。
「親しくするな、あいつの兄貴は刑事だ」
「うん、いい人だけれど」
心配しなくても親しくはしていないからと言いたいが、怖くて声にならない。ヒロといるといつも思うように話せなくなるのだ。緊張で押しつぶされそうになる。
アリアはうつむいた。
「あいつらに女だって知られたのか？」
「いや、彼氏がいるって冗談で言ったら男同士だと思ったようで、リアクションが面白かったよ」
アリアは何とかヒロを和ませようと思って、笑い話のつもりで話したのだが、逆効果だった。
楽しそうに話すアリアを見て、ヒロの表情がより険しくなったのだ。
「長居は無用だ、最小限の荷物を持って行くぞ」
ヒロは冷たい命令を出し、立ち上がった。
「今から？」
ヒロの一言でアリアの不安が一杯になった。このままでは引越しは逃れられない。でも、ここでの生活を壊したくはない。
アリアはヒロから顔をそむけ、「ここに、いたい」と小さな声で反抗した。
ヒロがため息を漏らした。おもむろに、アリアの傍に屈んで、アリアの頬に手のひらをそっと寄せた。
「どうした、離れたくない理由でもあるのか？」
以外にも、ヒロの声は優しかった。アリアの顔を覗き込んだヒロの瞳には動揺の色が見えた。
アリアは今までヒロに反発したことがなかった。初めての反抗にき

っとヒロは戸惑っているのだ。
もしかしたら、希望を聞き入れてくれるかもしれない。
「もう転々とする生活はしたくない。義兄さん、それじゃだめなの？」
普段であれば、義兄と呼べばヒロは怒る。アリアはわざと義兄と呼んでみた。これで大丈夫だったら、怒らずに聞いてくれるのではないかと思ったのだ。
「本当の兄妹じゃないんだから、ヒロでいいと言っているだろう」
ヒロはやんわりと訂正した。
今だったら、喧嘩にならずに話せる。
ずっと、聞くに聞けないでいたことを思い切って口に出した。
「……いつもそういうけれど、だったら私の父親は誰？」
「詳しくは、知らない。そんなことより、以前のようにまた一緒に暮らさないか」
やはりいつものように話題を変えてられしまった。アリアはその言葉に表情を硬くした。
なだめるように、ヒロの手がアリアの頬を優しくなぜている。
「だめなのか？」
ヒロの顔は悲しげだった。アリアは胸が苦しくなった。
ヒロのそんな顔は見たくない。
「……ヒロは今の『仕事』続けるの？」
「いつかはやめる、心配するな」
そう言うと、アリアを抱きしめた。
「ヒロ？」
「アリア……」
ヒロがアリアを抱きしめることはよくあったのだが、ヒロの態度がいつも以上に強引で、アリアは急に怖くなった。
「離して！」
そのまま強引にキスをされそうになったその時、「やめろ」と、ヒロの背後から聞き慣れた声がして、ヒロの腕を捻った。

「いてっ」
「嫌がっているだろ」
ヒロが捻られた腕をさすりながら振り返った。
ヒロの背後に、十無が険しい顔をして立っていた。十無の顔を見たアリアは、少しほっとしたのだった。
「人の家へ勝手に上がりこんで、日本の警察はどうなっているのだ？」
「言い争っているようだったからな」
「ふん、最近の刑事は痴話喧嘩の仲裁までして、よっぽど暇なのか？」
ヒロはじろりと十無を睨んだ。
「痴話喧嘩だと？」
「そうだ、俺達はそういう関係だ」
十無が動揺し、少したじろぐと、すかさずヒロがそう続けた。
「違う、ヒロの悪ふざけだ」
アリアが慌てて否定したのが悪かった。ヒロはアリアの言葉を聞いて一層かっとなり、怒りが収まらなくなってしまった。
「俺はこいつを愛している、悪いか！　お前、十無とか言ったな、ちょっと顔を貸せ。アリアはここに居ろ」
そう言って十無の襟首をつかみ、奥の部屋へ引っ張り込んだ。
私はヒロの家族だけれど、所有物ではないのに。
居間に一人残されたアリアは、ヒロに言いたいことは山ほどあったが、思い切ってそれを言うことには、抵抗があった。
嫌われたくない、一人は嫌という複雑な気持ち。アリアもまたヒロに依存していた。

　アリアを愛していると叫んだヒロに、十無の頭はパニックを起こしていた。
この男は本気なのか？　義弟で、しかも男なのに。まさか本当に……。でもあいつはどうなんだ？

ヒロに連れて行かれながら、東十無の思考は停止していた。
「刑事さん、アリアのことに随分と首を突っ込んでいるが、関わりすぎると警察にいられなくなるぜ」
「脅しか？　この手を離せ」
十無も負けじと、やり返す。ヒロは手を離した。
「俺のことを色々嗅ぎ回っていただろう」
「ああ。中原洋（なかはらひろし）、年齢二十八歳。タクシー運転手ということだな。だがこれは偽名だろう？　アリアとは義理の兄弟だと？」
「親が再婚して兄弟になった。血のつながりはない。それより刑事さん、いったいアリアをどうしたいと思っている？」
「どうしたいって……」
考えてもいなかったことを唐突に訊かれ、十無は鸚鵡返しするのがやっとだった。
「今だって仕事で張り込んでいるようには思えないぜ。一人で来ただろう？」
十無は何も言い返せなかった。
「図星か、嘘をつけない奴だ。アリアのことが気になるのか？　男でも。俺は男だろうが関係ない」
ヒロはわざと男ということを強調しているようだった。
「あいつを引きずり込むな」
「何に？　俺は何もしちゃいない」
「アリアが可哀想だ」
ヒロが口の端で笑った。
「ふん、何も知らないくせに。所詮お前は刑事だ。中途半端に手出しするな。アリアが好きなら刑事を辞めることだ」
「好きって、俺はただ」
無意識に避けていた言葉。十無は頭を殴られたようにくらくらした。
動揺を隠せないでいる十無に、「所詮、男だからな」と、ヒロはまた意地悪く繰り返した。

「あいつは本当に男なのか？」
「ああ、女の格好だと全くわからないが、ちゃんと見た」
ヒロは真顔だ。
「見た？」
十無はヒロの言葉を理解できなかった。
「さっきから言っているが、俺達はそういう関係だ」
「そんな……」
十無は想像してしまった。顔が見る見るうちに真っ赤なるのが自分でもわかった。
十無の頭の中は真っ白になってしまった。

5・柚子の生い立ち

二人が部屋から出てきたが、何を話していたのか、アリアにはまったく想像がつかなかった。
ヒロはポーカーフェイスではあったが、笑いをこらえているようだったし、十無は茫然自失といった感じだった。
とにかく、ヒロの表情が穏やかになり、引越しは当分延期だと言われ、アリアはほっとしていた。
十無が帰る間際に、アリアの方を見て「俺には踏み込めないのか」とわけのわからないことを呟いていた。
アリアがあれはヒロの悪ふざけだからと念をおしても、上の空のようだった。
「十無に変なこと言った？　人の顔見てため息をついていた」
「からかいがいのある面白い奴だ。おまえがここにいたらあいつを利用できる」
「何を考えているの？」
「これから考えるのさ」
ヒロが楽しそうにそう言ったのとは裏腹に、アリアはまた何かことが起こるのだろうかと、暗い気持ちになった。
アリアの携帯電話が鳴った。
「ヒロがここにいるのに、誰が？」
不審に思いながら、アリアはとりあえず電話に出た。
「アリア？　私、柚子。連絡もしないで急にいなくなってごめんね」
長く離れていたわけではないのに、アリアはとても懐かしく感じ、声を聞くと胸が一杯になった。
「何処にいるの？」
「旭川」
「って、北海道？」
「ちょっとね、学校休んじゃった」

「一体なに考えているの、心配するでしょう」
声が聞けてほっとしたと同時に、連絡もせずにいなくなった柚子に怒りがこみ上げてきて、アリアはつい強い口調になった。
「……親のことを調べていたの。そうそう、ヒロにもごめんなさいって伝えておいて。ヒロが残していった柏木のお金の残りを持っていったの」
「やっぱり柚子があの婚約者を仕向けたの？」
「少しは私のこと疑っていたのね。ま、仕方がないか。どうしてもお金が必要だったの、多目に見てね。もう少ししたら帰るから」
「おい、待て。下手したらパクられるところだったんだぞ」
アリアから電話を取り上げ、ヒロが怒鳴った。
アリアも電話に耳を傾けた。
「ヒロもいるの？　だって本当は始め、それが目的だったんだもん。みんな捕まったらいいって思っていたの。復讐ね」
「復讐か」
ヒロは驚かなかった。やっぱりそうかと納得しているようだった。
「そう、あなた達家族全てに。ヒロはもう知っているのでしょう？　私のこと。でも、アリアは悪くない、私と同じで被害者だわ。それに……一緒にいたい」
「勝手に決めるな、アリアとはもう会わせない。おまえは危険だ」
「ヒロは関係ない、アリアに決めてもらう」
「俺とアリアは同じ意見だ」
「私は、……柚子に帰ってきてほしい」
側で二人のやり取りを聞いていたアリアは、ヒロの顔色を窺い、ためらいながらも、きっぱりと言った。
ヒロは顔をこわばらせた。
「じゃ、あと三、四日で帰るから。またねヒロ！」
アリアの気持ちを聞いて自信を持ったのか、柚子は一方的に電話を切った。
ヒロに怒られる。アリアは覚悟を決めてじっと黙っていたが、ヒロ

はただ、困ったような顔をしただけだった。
「ヒロは、柚子の何を知っているの？」
　アリアは恐る恐る聞いてみた。
「……お前が嫌な思いをするから、できればこのことには触れたくなかったが」
一呼吸おいて、そう前置きしてからヒロはキッチンに立ってウイスキーの水割りを二人分作り始めた。そして、居間に戻ると、黙って待っていたアリアに水割りを渡し、渋々話し始めたのだった。
「柚子の本名は矢萩柚子（やはぎゆず）だ。聞き覚えがあるか？　今は親戚のうちの養女になっているから姓が変わって杉沢（すぎさわ）になっているが」
「矢萩？　聞いたことがない」
アリアはきょとんとした。
「……ある男が浮気をした。相当のめり込んで、妻に離婚も考えてくれと言った。だが、相手の女は何も言わずまもなく他の男と結婚してしまった」
水割りで口を潤しながら、ヒロはゆっくり言葉を選びながら話しているようだった。
「相手の女は妻と死に別れた子持ちの男と結婚してしまい、本気だった男は意気消沈した。その後も男の気持ちはなかなか妻の方に戻らず、その男の妻は繋ぎ止めたい一身で、もともと病弱な体で出産に耐えられない体だったのに子供を望み、……出産直後に亡くなった」
ヒロはアリアの方を見て話していたが、目線をグラスにそらした。
「出産のために亡くなった女が柚子の母親だ。そして、お前の母親が男の浮気相手の女だ」
「母さんが柚子の家庭を壊し、柚子の母親を死に追いやった……」
　アリアは硬く目を瞑り、両手で顔を覆った。何てことだろう、柚子の両親の幸せを滅茶苦茶にしたなんて。
その女の家族全てを恨んで、同じように家庭を壊してやりたくなって当然だ。

「柚子は、うらんでいるよね」
「まだ続きがある。柚子の父、矢萩孝介（やはぎこうすけ）というのだが、その矢萩の妻が亡くなったことを知ったお前の母は、矢萩に密かに会うようになったのだ。そして、お前の母は俺の親父、美原博一（みはらひろかず）に一方的に離婚届を置いて、家庭を捨てて矢萩の元へ走った。幼かったお前は、母親に連れられていった」
「じゃあ、生まれたばかりの柚子は、私とも一緒に暮らしたことがある？」
「柚子は母親が亡くなって直ぐに、乳児院に預けられていたはずだ。矢萩が乳児を育て切れなかったのだろう」
酷い。柚子は母親を亡くしただけでなく、父親の愛情も受けられずに育ったのだ。
アリアは言葉もなかった。
「結局、入籍直前に矢萩孝介が交通事故で亡くなったから、お前の母と矢萩は短期間同棲していただけだが」
もし、矢萩夫妻がうまくいっていたなら、柚子の母親は、自分が死ぬかもしれないというリスクを負ってまで、子を持つことを希望しただろうか？
幸せであったなら、柚子は生まれてこなかった？　そんな風には思いたくないが、ひょっとして柚子もそうやって自分を責めたのだろうか？
母の命と引き換えに生まれた。自分の存在は一体なんだろうかと。
柚子は、父親の不倫があったから生まれてきた。両親に本当に望まれて生まれた子供じゃないということなのか？
アリアは、柚子のあまりにも過酷な過去に、途中で耳を塞ぎたくなるのを我慢して、じっと身を硬くして聞いていた。
「乳児院にいた柚子は、父親が事故死した後、杉沢という東京にいる親戚の家の養女となった。あまりいい扱いは受けなかったらしい、遺産も知らないうちに使われていたようだ。そんな環境で誰かをうらまない方がおかしいかもしれない」

そんな影を一つも感じさせなかった柚子。
どうしてあんなにも強く生きてこられたのだろう。復讐を糧にしていたのか。そうではないと信じたい。そんなことのために、柚子の一生を台無しにしてほしくない。
アリアは何も知らなかった自分が嫌になった。柚子にどんな顔をして会えばいいのだろうか。
「もう一つ、大事な話がある。お前の母は俺の親父と結婚する直前に既に妊娠していたが、同時に矢萩とも関係があった。二股をかけていたということになる」
「なぜそんな？」
「お前の母親は結婚詐欺師だ。お前を妊娠していったん廃業していたが」
「……知らなかった。あのひとは、しょっちゅう付き合っている男の人がかわったけれど、ただ、だらしない人なのかと思っていた」
そう言われると、思い当たる節が沢山あった。
アリアの母は、アリアと二人で暮らし始めた後、旧姓の浮島（うきしま）ななと名乗り、さっそく男と付き合い始めたのだった。男性のタイプは様々で節操がなく、どの相手とも短い付き合いで、相手が変わるごとに住む場所も変わった。嘘も平気で、子持ちだということを隠して付き合い、アリアがアパートに帰れなくなることも多々あった。
男たちからうまく金を巻き上げていたのだろう。仕事をしている素振りはなかったのに、お金に困ることはなかった。
次々に知った事実に、アリアは呆然としていた。ヒロはそんなアリアに、もう一つ新たな事実を伝えた。
「お前の実の父親のことだが……。離婚の原因はお前が矢萩の子だと知ったからだと親父が言っていた。だが確認はしていない、あくまでも憶測だ」
「矢萩孝介が父かもしれないの？　じゃあ、柚子とは腹違いの姉妹？」
浮島ななが美原博一と結婚した後にアリアは生まれたのだが、公然

の秘密のように、周囲では美原の子ではないと噂されていたのだという。
幼い頃、父親にいつも冷たい目で見られていたのをアリアは覚えていた。ヒロと仲良く遊んでいると、必ず別の場所へ連れて行かれたのだ。
父親の態度はアリアに対してだけ冷たかった。
何も悪いことをしていないのに、どうして自分だけ怒られるのか。
アリアは幼心に、漠然と疎外感を味わっていた。そんなアリアをかばってくれたのはいつもヒロだった。
　母親に連れられていなくなったアリアが、ヒロに見つけられて一緒に暮らすようになった時、兄妹だが血は繋がっていないのだとヒロから知らされたのだった。そのとき、アリアに驚きはなかった。やっと父の態度の原因がわかり、自分が悪かったわけではないと、ようやくほっとしたものだ。しかしそのとき、ヒロはそれ以上詳しいことを教えてくれなかった。
今はっきりわかった。自分は不倫の末に出来た子供だったのだ。父、美原博一がアリアを疎ましく思ったのも無理はない。
でも、自分にはヒロもいるし、ひどい母親だがまかりなりにも母もいる。だけど、柚子には……誰もいない。
「そして明日が矢萩孝介の命日だ。柚子はそのこともあって旭川へ行ったのかも知れない」
　ヒロのその言葉を聞いて、アリアはいてもたってもいられなくなった。

翌朝、アリアは半ば衝動的に動いていた。柚子に少しでも早く会いたい、そしてきちんと確かめたい。本当に異母姉妹なのか。
でも、異母姉妹だとしても、柚子は本当に自分を恨んでいないのだろうか。
柚子の家族を崩壊させた女の、子供である自分を。
会いたい気持ちも強かったが、反面、柚子に会うのが怖くもあった。

そんな気持ちを抱えたアリアに、運悪く同伴者ができてしまった。
「やっぱりついてくるの？」
アリアはため息をつきながら、隣の座席に座っている昇を見た。
羽田空港。二人は旭川行きの飛行機に搭乗し、座席についていた。
この探偵は、どうしてこうも付きまとうのだろう。
あの後、ヒロは遅い時間に帰ったが、アリアはその後もまだウイスキーを飲んでいた。
そして、ほとんど眠らないままに、朝方、マンションを出て、羽田へ向かったのだった。が、出かける間際に例のごとく昇がやってきてしまい、なんだかんだといってついてきたのだった。
「丁度旭川に行く用事があってね」
「ふうん、……職なくさないようにね。不景気だから再就職は厳しいと思うよ」
「だから、仕事だっていっているだろ」
昇の携帯が鳴った。
「もしもし、あ、所長！　ちょっとその、旭川に急用で、もう離陸するから携帯を切らないと、例の浮気調査？　してますって、大丈夫ですよ。それじゃ、また後で」
電話の相手はまだ話しが終わっていないようだったが、昇は慌ただしく携帯電話の電源を切った。
「いいの？　ほんとにクビになりそうだけど」
「いいんだ、それより柚子が旭川にいるって？」
「旭川の何処にいるかはわからないけれど、帰るのを待っていられない」
「あてはあるのか？」
「少しは」
「俺に探させてくれないか？　これは依頼として。きちんと料金は貰う、もちろん秘密厳守だ、十無にも言わない」
「そんなことできるの？」
「信用してくれ。俺は俺、兄貴は兄貴だ」

「どうしてそこまで私に関わるの？」
「ただの知りたい病さ。それにお前がまっとうな生活が出来る手助けになれば」
「私はいたって普通です」
「どこが。で、雇ってくれるのか？」
「嫌だと言ってもどうせついてくるでしょ」
「それはそうか。じゃあ契約成立でいいな」
「そうしないと、十無に何でも筒抜けになると言うことでしょう？」
「そんな嫌な言い方するなよ、まるで俺が脅しているように聞こえる」
強引な申し出に、アリアは観念したが、一人で柚子に会わないで済むと思うと、少し気持ちが軽くなった。
「しっかり働いてね、探偵さん」
ほっとしたせいかアリアは気が緩んで急に睡魔が襲い、窓に寄りかかってすうっと眠ってしまった。
「アリア、寝たのか。随分と無防備な奴だ」
羽田を離陸後すぐに、アリアの小さい寝息が聞こえ、安心して眠りについたアリアを見て、昇は微笑んだ。

「おい、起きろ、着いたぞ」
旭川まで約一時間半の空の旅はあっという間だった。酷く雪が降っていたが何度か旋回し、どうにか着陸できた。
旭川空港からバスに乗り換えた。平日の為か、ビジネスマンに混じり、スキーヤーが数人のみで、空席が目立った。
道中は、一面、白銀の世界だったが、景色を楽しむ余裕がないほど雪はひどく降り続いていた。
市街地が近くなっても路面の雪が巻き上がり、視界は数メートルがやっとで、前方の車もよく見えない状態だった。
「ひどい雪だな、何も見えない。俺はこんな所には住めないね」
雪が吹き付けている窓をのぞきながら、昇が言った。

「私は好きだけれど。雪がないと冬の感じがしないから」
「お前、ひょっとしてこっちの出身？」
「さあね」
アリアをじっと見つめる真顔の昇に、アリアはしらを切った。
夏場であれば広々とした二車線はあるであろう車道は、両脇にできた一メートル近くある雪山に狭まれ、路面も圧雪で白一色だった。
「こんな道でよく運転できるな」
「これから体験できるよ、レンタカーを借りるから」
アリアはふふっと笑った。
「げ、勘弁してくれよ」
「車がないと、ここでは身動きがとれない」
そんな話をしているうちに、バスはのろのろと、旭川駅前に着いた。
「やっぱ寒いな、氷点下か」
白い息を吐きながらバスから降りた昇は、両手をコートのポケットに突っ込み肩をすぼめた。
ワイシャツにネクタイ、その上に薄手のステンカラーコートを羽織っているだけの昇は、かなり寒そうだった。
機内アナウンスで、最高気温は氷点下七度と放送していたのを思い出した。
「その格好じゃだめだ。近くのデパートに寄ろう」
アリアが歩き出したとき、後ろから「うわっ」と昇の叫び声が聞こえ、振り返ると昇が転んでいた。
「気をつけなよ」
「こんなつるつるの道、お前はどうしてそう平気で歩ける？」
路面は雪というより氷のように光っており、おまけにでこぼこしている。
「ああ、靴も買わないとね。それに慎重に歩けば大丈夫」
「そりゃそうだけれど」
昇はぶつぶつと文句を言いながら立ち上がった。
これは、世話が焼けるかもしれないなと、アリアは苦笑した。

二人はデパートのコート売り場へ行った。裏地がしっかりしている厚手のトレンチコートを見繕い、昇に試着させた。
「丁度いいね、じゃこれを。このまま着ていくのでこっちのコートを袋に入れてください」
アリアが店員にそう頼んだ横で、値札を見た昇が慌ててアリアに耳打ちした。
「待てよ、こんなに高いコート、買えないよ」
「経費で落ちないの？」
「落ちるわけないだろ」
「そっか、これいくらなの？」
「二十万円でございます」
店員がにこやかに答えた。
「じゃ、これで」
アリアは現金で支払いを済ませた。
「こんな高い物を買って貰う筋合いはない」
「コートを選んでいる時間がもったいない」
「金はもったいなくないのか？」
昇が目を丸くした。
「さ、行くよ」
「おい」
「似合っているよ」
アリアはそう言ってくすっと笑った。
「なっ……」
アリアの一言で、昇の顔が真っ赤になった。

6・命日

「やっぱり俺が運転するのか？」
「もちろん。ナビがついているから道は大丈夫でしょ？　それに道が碁盤の目のようになっているから、そう迷わないで済むと思うけれど」
駅前の店でレンタカーを借り、昇が運転席に座った。
アリアはこともなげに言ったのだが、昇はハンドルを握り、緊張している。
「俺、雪道は初めてだ」
「ゆっくり走れば大丈夫」
「挑戦してみるか。それで、まず何処へ行く？」
昇は観念して開き直ったようだ。
「矢萩建設」
「ナビで検索してみるか、あれ？　ないぞ」
「じゃ、住所で」
そう言ってアリアが検索してみると、画面の地図上には違う会社名が載っていた。
「美原工業！」
思わずアリアは叫んだ。それは、ヒロの父、美原博一の会社だった。
「どうした、この会社に何かあるのか？」
「買収されたのかも」
そう呟き、アリアは少し考え込んだ。
柚子の父、矢萩孝介が経営していた矢萩建設だった場所が、ヒロの父の会社、美原工業になっている。
偶然とは思えなかった。
「なあ、わかるように説明してくれよ」
「昇はこの会社がいつ変わったのか調べて」
「おまえは？」

「私は、行くところがあるから、後でこっちから連絡する」
「何処へ行くんだよ、連絡って俺の携帯の番号教えてないぞ」
「電話番号は知っている。じゃ」
アリアは車を降りると、タクシーを拾って乗り込んだ。
昇が文句を言っていたが、アリアはそれを無視して別行動をとった。

アリアが乗ったタクシーは、郊外にある霊園に着いた。
そこは山を切り開いて造成され、何千とある墓が整然と並んでいて、団地のように見えた。
昨夜、アリアはヒロから矢萩孝介の墓所を聞きだしていた。
「運転手さん三十分ほど待っていてもらえませんか」
「いいよ、誰かの命日かい？」
「はい、多分父の」
「多分？」
タクシー運転手は首をかしげて呟いた。
どの墓も雪に埋もれており、ほとんど見えなくなっていたが、場所を示す記号が書かれた立て札を頼りに探すと、道路沿いにその墓はあった。
矢萩家之墓。
その墓の周囲だけ、綺麗に除雪され、菊の花束が寝かせて置かれていた。
花束には雪はほとんどかかっておらず、お供えされてからあまり時間はたっていないようだった。
「柚子と入れ違いだったか」
アリアは墓の前にかがんで両手を合わせたが、会ったこともなく、顔すら知らないのだ。ここに眠る人が父親だという実感はなかった。
病弱な妻を捨て、別の女に走った男。妻が死んだ後もなお、その女を忘れられなかった男。もう愛していない妻との子供、実の娘が生まれたとき、彼はいとおしく思ったのだろうか。
アリアにはその男を理解できなかった。ただ、柚子が可哀想でなら

なかった。
立ち上がろうとした時、花束の下に封筒を見つけた。
中には柚子からのメモが入っていた。
『アリアへ、あの電話の後にヒロから色々聞いて、きっとここへ来るんじゃないかと思って。柚子はこのホテルにいます』
その下には旭川駅前にあるホテルの名前と部屋の番号が書かれていた。
アリアは肩や頭に積もった雪を払いながら、待たせてあるタクシーに乗り込んで、そのホテルへ直行した。

柚子はアリアを待っていたかのように、ホテルのロビーにあるソファに座っており、手を振りにっこりした。
「アリア、やっぱりここまで来たのね」
「柚子？　わからなかった」
アリアは緊張した笑顔で、柚子と対面した。
「変装はアリアの専売特許じゃないわ。高校生がこんな時期にうろついていたら補導されちゃうでしょ」
柚子は髪を下ろし、辛子色のセーターにベージュのロングスカート、薄手のグリーンのカーディガンを着て、化粧もしており、女子大生のように見えた。
「……昼食まだなんだけれど、柚子は？」
「食べてない」
「じゃあ、ここのレストランで一緒に食べようか」
アリアはごく自然に柚子に話かけようとしたが、目線を合わせずに、ぎこちなく柚子を昼食に誘った。二人はホテルの一階にあるレストランに入り、ランチを注文した。
アリアは柚子を前にすると、何から話していいのかわからなくなり、窓の外に目をやって、ゆっくりと落ちてくる大粒の雪をぼうっと眺めた。
「どうしたの？」

「あ、うん。なんだか頭の中真っ白で」
「変なの」
柚子は肩をすくめてくすっと笑い、態度は姿を消す前となんら変わりない。
「ヒロから聞いたよ。ごめん、何も知らなくて。早く会って謝りたかった」
暫くして、アリアがやっと口を開いた。
「アリアは悪くない。美原ななと美原博一をずっと恨んでいた……今も許せない」
柚子は少し強い口調だった。
「そう」
アリアは何と言って良いかわからず、ただそう答えた。
ウエイターが和風スパゲッティにサラダ、コンソメスープを運んできた。
「今回は墓参りもあって旭川へ来たけれど、今までもずっと、まとまったお金がたまる度に少しずつ調べていたの、美原ななのこと」
「私やヒロのことも？」
「うん。初めはななとその家族の生活もめちゃくちゃにしてやろうと思って、色々調べたの。そうしたら、アリアとはもしかして血がつながっているんじゃないかと思って会いたくなったの」
「復讐のため？」
「そう思っていた。でも、ななとは違う、会ったらそう感じたの。アリアは矢萩孝介の血を強く受け継いでいるのよ、きっと」
「柚子も、私と柚子が異母姉妹なのかはっきりとはわからないの？」
「うん、多分美原ななしか真相はわからないと思う。でもきっとそう。私達似ているもの」
柚子がそう断言すると、アリアは本当にそんな気がしてきた。
あんな母以外にも血の繋がりがある妹がいた、一人じゃない、そう思うとアリアは嬉しかった。
「それと、父の交通事故のこと、昔のことだから情報は少ないけれ

ど、事故じゃなかったと思っているの」
「どういうこと？」
「車に細工されたのよ、きっと。事故だなんて不自然だもの。父はすごく慎重な人だったって聞いたわ」
「そうだとしてもいったい誰が？」
「矢萩建設は父の親戚の手に渡ってからまもなくのっとられたの、美原博一に」
アリアはそこまで考えていなかった。だが、もしかすると。
美原博一が妻を取られた恨みで、相手の男、矢萩孝介を――。そして、会社までもつぶしにかかったのか。
「……美原を疑っているのか。でも、それだけじゃなんとも言えない」
アリアは冷静に言った。
「当時の地元新聞を図書館で見たけれど、たいしたことは載っていなかった」
柚子は悔しそうだ。
柚子の気持ちが晴れるには、真相をはっきりさせるのが一番だろう。
「後は警察か。じゃあ、昇に聞いてみようか」
「昇？」
「うん、成り行きで昇もこっちへ来ているから。昇だったら、警察につてがありそうだ」
アリアはにっこり微笑んだ。

柚子とアリアがランチを食べている頃、昇はラーメン屋で一人寂しくラーメンを食べていた。
「アリアからの連絡も無いし、これからどうすりゃいいんだ？　今夜泊まるホテルもまだ決めていないのに。まさか俺をまく為に適当なことを言ったのか」
昇が色々考えて段々不安になってきた頃、タイミングよく携帯電話

が鳴った。
「アリアか、お前どこへ行っていたんだよ」
「ちょっとね。それより昇、こっちの警察につてはないかな。調べたいことがあるんだけれど」
「叔父がいるけれど、でも無理だ。急に言われても」
「無理かどうか聞いてみて。何年か前の交通事故で、運転していた矢萩孝介という男が亡くなった時のこと」
「矢萩？　確か矢萩建設の元社長だな」
「調べたの？」
「ああ。美原工業に行ったら、矢萩建設だった頃からいる臨時雇いのじいさんがいて、色々聞けた。事故の後、一時親類が会社を引き継いだが、二年位でさっさと美原工業に売り渡されたということだ」
「その事故のことは何か言っていた？」
「生真面目な社長だったから、スピードを出しすぎて事故を起こすなんて、今でも信じられないと言っていたぜ」
「そう」
「矢萩社長の娘が柚子だな？　矢萩社長が亡くなってから、親類の杉沢が社長につき、柚子を養女に引き取ったんだろ？」
「さあ、私はよく知らないから」
昇は探偵としての腕はそう悪くないのか、予想外にこの短時間で情報を集めていた。
だが、あまり首を突っ込まれても困る。そう思ってアリアは自分が知った情報を昇に伝えなかった。
「お前も何か関係しているのか？　ま、とりあえず叔父さんにも聞いておくよ。で、俺はこれからどこへ行けばいい？」
「そのことを訊いたら、後はぶらぶら観光でもしていてよ」
「おい、それはないだろ。お前の所へ行く。雲隠れされそうだからな」
「わかった、じゃ、待ち合わせね」
アリアは笑いながら快諾した。

五時に旭川駅前で落ち合うことにした。

7・待ち合わせ

「アリア！　遅いぞ。もう来ないかと思った。寒くて凍死してしまう！」
昇は鼻の頭を赤くして、大げさに体を震わせている。
既に約束の時間より一時間近く過ぎて、午後六時を回っていた。
駅前のホテルにある電光掲示板には、氷点下十度と気温の表示がある。雪はやんでいたが、かなり冷え込んできていた。
昇は旭川駅の入り口で寒くてじっとしていられず、行ったり来たりしていたようだった。
「ごめん、寝不足でちょっと横になっていたら時間過ぎちゃった」
「ホテルの部屋とったのか？」
「柚子がツインに一人で泊まっていたから、一緒に泊まろうと思って」
「おい、同じ部屋はまずいだろ」
「そうかな」
「って、おまえなぁ。柚子だって年頃の女の子だろう」
ああそうか、今の私は男だった。と、アリアは納得した。
「で、俺の部屋は？」
「あ、すっかり忘れていた」
「なにい！」
「冗談、ちゃんととってあるよ」
アリアはくすっと笑った。
「まったく」
「お腹空いたね。昇、夕食は和食でいいかな。もう予約しているけれど」
「いいよ。柚子はどうした？」
「後で真っ直ぐ店に来るって」
「変な奴だな」

「ここからだと店まで少し歩くけれどいい？」
「寒いついでだ、かまわないよ」
昇は訳のわからないことを言い、二人はメインストリートの歩行者天国である買い物公園の、ライトアップされた氷像群を眺めながら、飲食店が立ち並ぶ三六街に向かって歩き出した。
「へえ、なかなか綺麗だな」
「そういえば明日から冬祭りだ」
「札幌みたいな雪像は無いのか」
「河川敷に大きいのがあったと思うけれど」
「ふうん」
黙って氷像を眺めながら歩いていた昇だったが、五分もしないうちに、弱音を吐いた。
「だめだ、寒い！　やっぱりタクシーに乗ろう」
「え？　ちょっとしか歩いてないよ。それに綺麗だし、歩こうよ」
「俺は一時間近く待って冷えきっていたんだぞ」
「ごめん、夕食はおごるからさ」
アリアはそう言って、昇の腕に手をかけた。
「何だよ、そうひっつくな」
「こうすると暖かいでしょ」
「男同士じゃ、変だろ」
「そうか」
アリアが腕から手を離すと、昇は「いや、やっぱりそのままで……」と言いかけてやめた。
「何？」
「あー、だめだ俺！　なんでもない、独り言だ」
「随分大きい声の独り言だね」
「大きい声でも出さないとストレスがたまりそうだ！」
「……なんだか大変そう」
アリアは昇のわけのわからない態度が可笑しくて、吹きだした。
結局、変な会話をしながら店まで歩いた。

ホテルで紹介された店は、花本と言う三十人も入れば満席になるような、こぢんまりとした創作料理店だった。
モダンな和風の店内には既に、何組か客が入り賑わっていたが、案内された席は個室のように区切られており、黒い大きなテーブルを囲んで、堀コタツのように足が下ろせるようになっていた。
柚子はまだ来ていない。
二人が向かい合わせに席に着くと、アリアの携帯が鳴った。
「アリア、私は行かないから二人でゆっくりどうぞ。でも昇に襲われない様に気をつけてね、じゃあまた明日ね」
「ちょっと、柚子どういうこと？」
アリアがそう言った時には、もう電話は切れていた。何を考えているのやら。
「どうした？　柚子か」
「来ないって、何を考えているのか……」
「いなくなったわけじゃないだろ」
「うん」
「じゃ、大丈夫だ」
柚子と久しぶりにゆっくり話したかったアリアは、少しがっかりした。
アリアがお任せのコースを頼むと、お通しと一緒にワインが運ばれてきた。
「はい、お疲れ様」
二人はグラスを合わせた。赤ワインがすうっと喉に降りると、体が温まった。
「ずっと気になっていたんだけれど、柚子とお前って、いったいどういう関係？」
「どうって、何て言ったらいいのか、兄妹みたいなものかな」
「本当の兄妹ではないんだろう？　……恋人ってわけでもないよな」
昇があれこれと探りを入れてくるので、面倒くさくなり、「わから

ない」と、一言答え、アリアはワインを一気にグラスの半分程飲んだ。
「わからないって、兄妹かもしれないということか、それとも恋人……」
「どうかな？」
真面目な顔をして昇が聞いてきたので、アリアはついからかってしまった。
昇は目を丸くしている。
「それより、何か分かった？」
アリアが話題を変えると、昇はそれ以上聞き返してこなかった。
「まだ分からない。叔父さんに連絡は取れたけれど、合間見て調べてくれることになった」
「そう」
「おまえ、美原工業と関係があるのか？」
「なぜそう思うの？」
「美原工業社長の美原博一には息子がいるが、行方不明だと聞いた。おまえのことか？」
「違う」
「矢萩孝介の命日に墓参りに行ったのは、本当に柚子を探すためだけだったのか？」
「どこで聞いてきたか知らないけれど、そうだよ」
「自分の父親が会社を乗っ取ってしまい、柚子に悪いと思ったからじゃないのか」
「全然違う、それに美原の息子は海外にいるらしいよ」
「それは表向きで、実際はどこにいるかわからないということだ」
矢萩孝介の行方不明の息子はヒロのことだ。昇はヒロとアリアを混同しているようだった。アリアが男だと通しているのだから無理はない。
昇が有能だとよくわかった。焦点はややずれているが、かなり確信に近い情報にたどり着いているのだ。

昇に問い詰められたが、料理とワインが運ばれて来て、話しは中断した。
アリアはほっとした。
「柚子は私をどう思っているのだろう」
刺身が入ったサラダ風の前菜をつまみながら、アリアはポツリと言った。
「仲が良い訳じゃないのか？」
「悪くは無いけれど、やっぱりどこか一歩おかれている感じかな」
「おまえ達の関係が良くわからないが、気にしすぎだろ」
アリアのワイングラスは、もう空になっていた。
「おまえアルコールに強いのか？　随分ピッチが早いな、大丈夫か」
「そう？　なんだか飲みやすくて、普段はあまりワインを飲まないけれど」
「潰れるなよ、帰りが大変だから」
「大丈夫」
アリアはにっこりした。

数時間後、昇の心配が本当になった。
「だから、やめろって言ったのに」
昇はため息をつきながら、よろけるアリアを支えた。
「そんなに酔ってないよ」
「嘘つけ、転びそうだぞ」
花本で食事をした後、アリアがカクテルを飲みたいと言って、昇を無理にカクテルバーへ連れて行ったのだった。
昇は店を出ると直ぐにタクシーに乗り込み、駅前のホテルへ向かった。
「やれやれ、とんだ酔っ払いだ」
ホテル前に着くと、昇は文句を言いながら、ロビーまでアリアを抱きかかえて歩いた。
昇がフロントで部屋番号を伝えると、キーと一緒に手紙を渡された。

それは柚子からだった。
『アリアへ。今まで同居はしていたけれど、隣のベッドに眠るのはちょっとね。私がシングル使わせてもらうから、ツインの部屋を使ってね。柚子より』
「ほら、柚子はもう子供じゃないんだから、気を使ってやらないと」
昇はメモに目を通すと、そう言いながらアリアにもそれを見せた。
「違う、柚子は面白がっているだけだ」
アリアは額に手を当て、ため息をついた。
「面白がっているって何を」
「あの、すいませんがもう一部屋空いていませんか」
アリアは、よろけていた割にはしっかりとした口調でフロントに尋ねた。
「あいにく、本日は満室となっておりますが」
「そうですか」
諦めるほかなさそうだ。柚子め、余計なことを企んで。
アリアはため息をついた。
「何もダブルに寝るわけじゃないんだから、別にいいだろ」
昇はそう言ってから、自分の言葉にはっとしたようだった。
「アリアと、同じ部屋で寝るのか？」
「……そうだね」
少し困った顔をして、アリアが返事をした。
「グラサンとっても顔は絶対見ない。今のおまえは仕事の依頼人だからな」
冷静に言ったつもりなのだろうが、昇の声は上ずっていた。
二人はエレベーターを降り、まだ幾分ふらついているアリアを昇が支えて歩いたが、一緒によろけていた。
「ふふ、大丈夫？　昇も酔いが回ってきた？」
アリアは気持ちよく酔っ払っていて、自然と笑いがこみ上げてくるのだった。
「違う、おまえが重いからだ」

「もう歩ける」
「いいや、部屋まで連れて行く」
昇はむきになっているようだった。
部屋に入るなり、アリアはベッドの隅にすとんと座った。
「ちょっと飲みすぎだったよね」
アリアは抑えても笑いがこみ上げてきて、またふふっと笑った。
「おまえ、まだ飲もうとしていたんだぞ」
昇もアリアと向かい合わせにベッドに腰掛けた。
「だって、カクテル美味しかったでしょ？」
「家でもよく飲むって言ったな。体壊すぞ」
「もう壊れているか」
「茶化すな、おまえ笑い上戸か？」
アリアはずっとくすくす笑っている。
口も軽くなり、気分がよく、何でもできそうな気分だった。
「昇って面倒見がいいね。そういえば、柚子が昇に襲われないようにって言っていたな」
「何だって？」
昇は顔どころか、耳まで真っ赤になった。
「柚子の悪い冗談」
アリアは笑いたいのをこらえている。
「襲うって……」昇は絶句した。
「そんなこと絶対にしそうにないよね、私が襲っちゃおうか」
「はあ？」
アリアは急に立ち上がり、昇の肩に腕をまわして、キスをした。
昇は硬直した。
「あ、やっぱり女の子が良かったね。ごめん、男で」
またくすくす笑いながら、アリアはどさりと仰向けにベッドへ横になった。
「おまえって、キス魔？　誰にでもするのか？　俺、本気にするぞ。……ヒロとはそういう関係なのか？　それとも柚子が……俺は男相

手に何馬鹿なことを」
昇は自分でも何を口走っているのか訳がわからなくなり、混乱していた。
「おい、アリア」
呼んでもアリアからの返事はなく、かわりに静かな寝息が聞こえた。
「なんだ、話しの途中で寝るな」
アリアの側に座り、昇は顔を覗き込んだ。
「誰が絶対にしそうに無いって？　本当に襲うぞ」
アリアの髪をそっと撫ぜると、昇はつい唇を重ねてしまった。
「ん……ヒロ、嫌だ」
昇ははっとし、「ヒロか」と呟きながら苦笑し、ため息をついた。
「俺、いったい何をしているんだ？」

8・戸惑いの昇

「ごめん、覚えていなくて。でももう機嫌直してよ、昇」
「ほんっとにお前、昨日のことを覚えていないのか？」
ホテルのレストランで朝食をとりながら、昇は面白くなさそうに口を尖らせて文句を言った。大きなため息までついている。
アリアは本当にきれいさっぱり覚えてなかったので、何も言いようがなく、黙っているしかなかった。
ただ、ぐっすりと眠れたことは確かだ。
「ねえ、何があったの？」
その横で、興味津々にそのやり取りを見ていた柚子が、口を挟んだ。
「俺ももう忘れた！」
トーストにかじりつきながら、昇はやけくそ気味だ。
「ふうん、何かあったんだ」
「何も無い！」
「アリアを襲っちゃったの？」
「やってない！　こいつが先に抱きついて来てキスしたんだぞ！」
つい口を滑らせ、昇の額に冷や汗が滲んでいた。
「あらら」
柚子はニヤニヤしてアリアと昇を見比べていた。
冗談、全く覚えがない。記憶がなくなるほど飲んだだろうか。
アリアは硬直して、真っ赤になり言葉もない。
「先にって言うことは、その後昇も『何か』したんだ」
柚子の口調は含みを持って、意地悪い。
「勘弁してくれ、もういいだろ？」
「別にゲイでもいいじゃないの」
「俺、先に部屋に戻って帰る支度しているからな」
青ざめたまま昇は逃げるように席を立った。
「柚子、面白がっているでしょう？」

「だって、面白いんだもん。でもびっくり、アリアって……」
「何にも覚えていない、頭が重い。飛行機に乗って大丈夫かな」
柚子にいつまでもそのことをつつかれそうで、アリアは話しを遮った。
「今日帰るの？　せっかくだから観光していこうよ～」
「元気だね……昇の叔父さんからの情報はまだ時間がかかりそうだから、東京に連絡くれることになったし、柚子も見つけて用事が済んだから、もう帰るよ」
「動物園に行きたい！」
とうとうアリアは柚子の強引さに負けて、帰りの飛行機を最終便に変更した。
その動物園は旭山という山の斜面にあり、冬期間も開園していた。園内は山の斜面がそのまま残されており、旭川市内が遠くに見渡せた。
「雪の中の動物園って初めて。さすがに寒いわね～」
アリアには柚子が異常にはしゃいでいるように見えた。
「柚子、何かあったのかな」
ペンギン館に向かって先を歩いている柚子に聞こえないよう、アリアは昇にそっと囁いた。
「いつもあんな感じだろ」
昇の、気にも留めていないような返答に、アリアはあまり納得できず、「そうかな」と反論した。
「ほら、二人とも早く～。すごい速さでペンギンが泳いでる。可愛い！」
ペンギン館を入っていくと、途中に透明なトンネルがあり、頭上や足元を気持ちよさそうにするりと泳いでいくペンギンが、間近に見えた。
「へえ、確かに凄い」
昇が感心している。
「こんなに早く泳ぐのね、知らなかった」

素直に喜び、見入っている柚子を見て、アリアは思い過ごしだったかなと思った。
間近で北極熊の様子を見ることができたり、サル山を見下ろしたりと一風変わった施設を、きゃあきゃあはしゃぎながら見て周る柚子に、昇とアリアは付き合った。
「二日酔いの体には、この寒さは堪える」
昇は大きな欠伸をした。
「昇も結構飲んだ？」
「おまえにつき合わされたからな」
「ごめん」
「き、昨日のことは気の迷いだから」
「うん、気にしなくていいよ」
昇が気を使うだろうと、極力笑顔をつくり、アリアは明るくあっさりと答えたつもりだった。
だが、何故か逆効果だったようで、昇はがっくりと肩を落としてしまった。

「そうか、それだけの存在か」
「昇、なーに一人でぶつぶつ言って赤くなったり青くなったりしてるの」
柚子が帰り際、温かい飲み物がほしいと言い出し、アリアが買いに行った隙に、柚子は昇に注文をつけはじめたのだった。
「昇、そんなんじゃヒロにアリアを取られちゃうわよ。せっかく人がチャンスを作ってあげたのに」
「変なことを言うな。……お前、わざとアリアを買い物に行かせたな？」
「えへへ。でも昇ってシャイね、今まで彼女いなかったの？」
「だって、男相手に……」
昇は口ごもった。
女性と真面目に付き合ったことはないが、女の遊び友達はいたし、

兄のように奥手というわけではなかった。だが今回は勝手が違う。何せ相手は男なのだ。
「そんなの関係ないじゃない、だったら、今度は十無に協力しようかな。十無は押しが強いかしら？」
「アリアの言っていた柚子が楽しんでいるっていう意味がよくわかった。だれかれかまわずけしかけて面白がっているだろう」
「なにそれ？　私はただアリアを助けたいだけよ」
「どういうことだ？」
「アリアはヒロといるとだめになるから」
話しの途中でアリアが車に戻って来てしまい、それ以上昇は柚子から聞けなかった。
動物園を出た後、昼食に蕎麦屋へ行ったが、何を食べたのかどんな味だったのか、覚えていないほど昇は上の空だった。
「昇、ぼうっとして、眠いの？　しっかり運転してよ」
運転中も、昇は柚子との会話を引きずっていた。
「あ、いや大丈夫」
助手席に座っているアリアに声をかけられ、昇は我に帰った。
三人はレンタカーで旭川空港へ向かっていた。
旭川の住宅街を抜け、アリアの案内どおりに空港へ行く真っ直ぐに続く裏道に入ると、数分もしないうちに畑が広がるのどかな丘の風景になった。
道は真っ直ぐだったが、丘を越えるために坂道を何度もアップダウンする。
路面が滑るので、昇は緊張しながら運転していたが、面白い道だった。
「車で良かった、こんな風景が見られたもの。北海道って感じ、美瑛みたいね」
柚子は雪景色を見ながら、『すごーい』『きれい』をしきりに連発していた。
そして三十分ほどで、旭川空港に着いた。

東京からの便が到着したばかりのようで、到着ロビーが賑やかだった。
「アリア！　連絡もしないで一体何をやっていた？」
その低い声に、昇はぎょっとした。
搭乗手続きを済ませるため、カウンターの前に並んでいたところに、アリアの義兄、ヒロが、アリアを見つけて駆け寄ってきたのだ。
昇はまたアリアを連れて行かれそうな気がして、身構えた。
「え？　ヒロ、どうしたの？」
ヒロを見て、アリアはきょとんとしている。
「おまえ、携帯の電源切っているだろう？」
「切っていないよ？」
アリアは自分の携帯をコートから取り出して確認すると、電源が切れていた。
「あれ？　いつの間に」
「柚子か」
ヒロが柚子をじろりと睨んだ。
「私？　知らない」
「まあいい、柚子にも会えたんだな。やっぱり探偵も一緒だったのか」
「ヒロって過保護。ちょっと連絡が取れなかったからって、東京からここまで来る？　普通」
「柚子には関係の無いことだ」
「あるわよ、一緒に暮らしているもの。一便ずらしたほうが良かった、そうしたら会わないで済んだのに」
柚子は、ヒロに向かって物怖じせず、憎まれ口の応酬だ。
もっと言ってやれ、と昇は心の中で応援していたが、さすがに口は挟めなかった。その場で成り行きをうかがっていた。
「柚子、もうやめなさい」
「は～い」
アリアにたしなめられて、面白くなさそうに柚子が返事をした。

「アリア、来い」
ヒロはアリアの肩を掴んで、強引に自分の方へ引き寄せた。
「これから東京へ帰るけれど」
「とんぼ返りも馬鹿らしいし、折角だからちょっと付き合え」
「嫌がっているだろう、やめろ」
横暴なヒロに、我慢ならなくなった昇は、ヒロの腕に手を掛けた。
「アリア、俺と行くだろう？」
ヒロは昇の存在を無視し、アリアの顔をじっと見つめて言った。
「……ごめん柚子。先にマンションへ帰って」
抗えない何かがあるように、アリアは抑揚のない声でそう言った。
「アリアが早く帰って来なかったら、私、またいなくなっちゃうかも」
「本当に行くのか？」
「直ぐ帰る。調査代も払わないとならないし」
そう言った時には、いつものアリアの口調に戻っていた。
「じゃあな、探偵」
そう言ってヒロは、わざとアリアの肩を抱き寄せて空港を出ていった。
「昇、いいの？　二人にしちゃって、ほんとに押しが弱いんだから。あ～あ、知らないっ」
これ以上は何もできない。柚子に言われるまでも無く、昇はかなり焦っていたが、どうすることもできないでいた。

東京に帰って四日が過ぎていたが、昇は憂鬱を引きずっていた。
今朝の天気も小春日和で、日差しが温かく、雪景色の中、アリアと過ごした時間が夢の中の出来事のように思えた。
夢だと思っていた方が楽かなとも思った。
四日しか経っていない、もう四日も経ってしまった。そんなことばかり悶々と考えて仕事にもならなかった。
十無に何かあったのかと聞かれたが、どう話していいのか、話す気

にもならない。
「また今日もそうやってボーッと過ごすつもりか？」
何処を見るでもなく、魂の抜けたような顔でパンをかじっている昇を見て、十無が呆れたように言った。
十無は非番のためのんびりしていたが、なぜか仕事のはずの昇も、十無が作った朝食をちゃっかり一緒に食べていた。
「アリアはまだ帰ってきていないんだな。誰かと一緒か？」
「……」
「もういい。お前じゃ話しにならん、柚子に会って聞く。このまま見ていられない」
「別に柚子に聞かなくても」
「じゃあいったい、帰ってからのお前はどうなっているんだ」
「……アリアは一緒に帰るはずだった。でもあいつが旭川に来て、結局そのままアリアをさらっていった」
「あいつって、ヒロか？」
「ああ」
「それでずっと気になって何も手につかないということか。相当重症だな」
「うるさい」
十無だって毎日俺にアリアは帰ってきたかと聞くじゃないかと、昇は続けたかったが、傷口をお互いつつきあっているだけの空しい感じがして、そこは口に出さなかった。
「俺に八つ当たりをするな」
「そういえば叔父さんに何か頼んだだろ？　俺とお前を間違えて連絡が来たぞ」
「ああ、ちょっと」
「古い交通事故の情報だな。矢萩孝介……杉沢柚子の父親か」
「なんだ、十無も調べていたのか」
「調べたってほどじゃないが」
十無が少し言葉に詰まった。

昇は十無も相当調べていたかと思うと、おかしくてにやついてしまった。
「なに笑ってるんだよ」
「いや、俺とたいした変わんないなと思って」
それには返事をせず、十無は叔父からの情報を話し始めた。
「それでだな、矢萩孝介の運転していた車は、カーブを曲がり損ね、ガードレールに激突し、即死状態だったということだ。ブレーキの跡がなく、当時は居眠り運転の可能性が高いと処理されている」
「不審な点はないのか？」
「特にない。だが、事故の数週間前から極端に仕事が忙しくなり、妻が亡くなってから乳児院に預けていた娘の元にも、ほとんど顔を出せないでいたとのことだ」
「過労か？　叔父さんがそんなことまで調べたのか」
「ああ。色々と俺が頼んで」
十無が曖昧な返事をした。
「ふうん、始めから十無に頼めば早かったようだ」
昇の嫌味は無視し、十無は話しを続けた。
「矢萩建設は小さい会社で、下請仕事をして成り立っていたようだ。その中でも当時、美原工業からの仕事が異常に増えていたということだ」
「美原工業って、矢萩建設を吸収した会社？」
「そうだ。しかし、そんな小さな会社を手に入れる為にわざと過労に追いやり、事故を起こすよう仕向けたとは考えられない。やはり、事故だったと考える方が妥当だと思う」
「そうだな」
やっぱり、思い過ごしなのか。
「だが、俺は美原が限りなく黒に近いと思う」
「どうして？」
「事故当時、夜遅くに仕事のことで矢萩を呼び出したのは美原だ。呼び出しはよくあったそうだ」

「嫌がらせか、恨みでもあるのか？」
「美原の身辺をよく調べないとなんとも言えない。勘だが、何かありそうだ」
「俺も調べるよ」
「お前はいいから、クビにならないようにさっさと食べて早く仕事に行け」
「ちぇっ」
昇は朝食を食べ終わると、アパートを追い出されるように職場へ向かった。
双子は怨恨の線で、美原と矢萩に関する情報収集を継続したのだった。

9・雪に埋もれた過去

深夜。雪明りと街灯の明かりが、降り続く雪を青白く照らし出していた。
落ちていく雪は再び宙を舞い上がり、いつまでも空を漂っているように見えた。
アリアは窓辺のソファに寄りかかり、カーテンを開けたまま、飽きることなくそんな雪を眺めていた。そうすると、気持ちが落ち着き、嫌なことも、面倒なことも、雪が全てを覆い隠してくれそうな気になる。
旭川の中心に近いマンションの七階。部屋はスタンドライトの明かりが部屋の隅で小さく灯っているだけで、夜だというのに外の方が雪明りで明るく感じられた。
「まだ寝ないのか？」
ヒロは寝室から出てきてアリアの横に座り、そっと肩を抱いた。
「明日、東京に帰っていい？」
視線は窓の外に向けたまま、アリアは消え入りそうな声でヒロに聞いた。
「急ぐ必要はない」
聞いても無駄だとわかっていたが、有無を言わさない口調で言い切られると、僅かな望みもかき消された気がした。
アリアは無意識にため息をもらした。
「……雪を見ていると嫌なことも思い出す、でもなぜか目を背けられない。逃れられなくて吸い込まれてしまいそう」
「何を言っている……お前、また俺のメーカーズマークを飲んだな」
ヒロはサイドテーブルの上にある、氷のみになったグラスを見て、顔をしかめた。
「ロックはだめだと言っているだろ？　強くないのに」
「眠れなくて」

「じゃあ眠れるように、俺が疲れさせてやろうか」
アリアを胸に引き寄せて抱きしめ、指先で唇をそっとなぞった。
「いやだ、ふざけないでよ」
手を払いのけると、ヒロはあっさりとアリアから離れた。
「ふん、意味がわかったのか。少しは大人になった」
「いつまでも子ども扱いしないで。何を訊いてもはぐらかしてばかり、親のことだって……何もかも全て教えてよ！」
自分は何でもお見通しだと言うヒロの態度は、アリアを苛つかせた。いつもならヒロのおふざけもアリアは聞き流して気にも留めないのだが、アルコールが入ったせいで多少気が大きくなり、絡んだのだった。
だが、ヒロは冷静だった。
「この前話した通りだ、これ以上何を知りたい？」
「柚子の父親は本当に私の親なの？　なぜずっと黙っていたの？　美原博一が本当の父親だと思っていたから、小さい頃、父……美原がなぜ私に冷たい態度なのかわからなかった。……ずっと私はいらない子なんだと思っていたななと不倫相手との子供だったなんて」
今までヒロに言えなかった思いが、一気に溢れた。
「俺だってそのことを知ったのはかなり後だ。当時俺も、親父がお前を何故疎んじるのか理解できなかった。離婚後、親父にお前を引き取らないのは何故か問いただしてようやくわかった。親父はプライドが高いから、初めから妻に二股かけられていたなんて、知られたくなかったのだろう」
「そう。でも今まで話してくれなかった」
「すまん、話しづらくて。母親が結婚詐欺師でお前の父親ははっきりしないなんて。いや、矢萩孝介がそうだとは思うが。それでそのことを話した後から、俺に冷たかったのか？」
「別に、それだけじゃないけれど」
アリアはまだむすっとしていた。
「……ななの元から連れ出して、良かっただろう？」

「……あの時は突然ヒロが来て強引に連れて行かれたから、選択肢はなかった。あれからもう何年になる？　何も言わず突然家を出たから……母さんは今どうしているか知っている？」
　あんな母親でも、一応母親には違いないのだ。やはり、アリアは気にかかっていた。
「あんな奴のことは心配しなくていい」
「知っているんでしょ？」
アリアは少し語彙を強めて言うと、ヒロは渋々答えた。
「……あの女は、また美原と復縁している」
「！　どうなっているの？」
「俺にもよくわからん。ななは何を考えているのか。もう関わりたくないね」
　アリアはパニックを起こしていた。不倫が原因で離婚した美原博一とななが、また復縁しているなんて。
「会って話しを聞こうなんて思うなよ」
ヒロは、アリアが思っていることを見透かしたように釘をさした。
「どうして？」
「このまま縁を切っておけ。会ってもななと美原に振り回されるだけだ」
「でも母さんに会って聞きたい、私の父は誰なのか」
酔った勢いでヒロに食って掛かっていたが、アリアは徐々に酔いが覚めてきていた。
「ななと一緒に暮らしていた時も何も話してくれなかったんだろ？
　それどころかあいつは男と過ごすことが多くて、お前はほとんど放任されていたと言っていたじゃないか」
「そうだけれど」
「親父とななが離婚した直後、ななとお前は姿を消し、俺は直ぐに探し始めた。ようやく突き止めた時には、矢萩は既に事故で亡くなり、お前達はまた消息を絶った……そして、やっとお前を見つけたんだ。今の生活を壊すな」

ヒロはアリアの前では止めていた煙草を、胸元のポケットから取り出し、マッチで火をつけた。
苛ついているようだった。
「でも、喉にいつまでも何かが引っかかったまま。自分はなんなのか、知りたい」
「俺がお前を必要としているだけではだめなのか」
本当に必要とされているのだろうか。また突然見捨てられ、置き去りにされるのではないか、アリアはそんなことを思った。
「お金に不自由はなかっただろうが、ななは男を変えるたびに住むところを変えるような生活。そして、愛情のない生活をおまえに強いてきたななが、今更母親らしいことをすると思うか？」
アリアは何も言い返せずに、俯いた。
「おまけにお前に男の格好をさせていただろ？　暫くぶりで会った時には、男だと思いお前とはわからなかった」
「それは、以前母さんが男の人と同棲していた時に、色々あって……」
「男がお前を襲おうとしたからだろ？　そんな危険な環境で生活させられて、お前を犠牲にしても詐欺はやめなかった女だぞ」
「ヒロだって、盗みをやめられないし、刑事達には女の格好では会うなと言うじゃない」
「それとこれとは話しが別だ」
「同じだ……煙草が煙たい。やっぱり今まで止めていなかったんだね、体壊すよ」
「これでも、だいぶ減らしたのだ」
苛々して無意識に吸ってしまった煙草を、銀色の携帯用灰皿を開き、もみ消した。
「ねえ、どうしてそんなに母さんに会わせたくないの？」
「何もいいことがない。もうこの話しは止めよう。嫌なことばかり思い出す」
ヒロはふいと、そっぽを向いてしまった。

アリアは納得できなかったが、ヒロが嫌がっているのがよくわかったので、それ以上は問いただせなかった。
雪は白々と青白い街中に、音もなく降り続いていた。

翌朝、八時過ぎにアリアが目覚めると、ヒロの姿はなく、居間のテーブルに走り書きのような手紙が置いてあった。
『ちょっと仕事を片付けてくる、夜には帰るから飲みに行こう。今、ななは旭川にはいない、一人で行動を起こすな』
「籠の中の鳥……」
そう呟くと、面倒くさそうにお湯を沸かし、ティーバッグの紅茶を淹れた。
「柚子の淹れた紅茶が飲みたいな……」
そう思うと無性に柚子の声が聞きたくなり、アリアは携帯を手にとり、柚子にコールした。
何度目かの呼び出し音の後、聞き慣れた甲高い声が耳元に響いた。
「アリアなの？　帰ってきたの？　ちゃんとご飯食べていた？　大丈夫？」
矢継ぎ早に質問攻めにされ、アリアはつい笑いがこみ上げてきた。
「なんだか柚子の方が保護者みたいだ」
「だって、心配なんだもん」
「今、電話していて大丈夫なの？」
「うん、学校に行く途中。ちょっと外野がうるさいけれど」
確かに、周りに柚子の友達がいるらしく彼氏からなの？　等と、きゃあきゃあと黄色い声が聞こえてきた。
「まだ、帰れないの？」
「ヒロからもう少し聞きたいことがあるから」
「そう……昇が仕事に手がつかないって、十無がぼやいていたよ」
「昇が？」
「アリアがヒロと二人きりで旭川に滞在していると思うと、穏やかにしていられないじゃない」

「いつもと変わらないよ？」
「鈍いわね、だってヒロはあの二人にはアリアのことを恋人だって言いふらしているのよ」
「そんなの冗談だと思っているでしょ、きっと。それに、だからってあの二人が何か関係あるの？」
「もう、アリアがそんなだから世話が焼けるのよ。ヒロは本気で言っているし、十無と昇もアリアが好きなのよ」
柚子はじれったそうに言った。
「まさか。だって、男だと思われているし……」
アリアは全く考えてもいないことを柚子に言われ、面食らった。
「まあいいわ、でも事実よ。よーく考えて行動してね、くれぐれもヒロに襲われない様に」
冗談には聞こえない真面目な口調でそう言うと、もう学校だからと柚子は電話を一方的に切った。
「ちょっと、柚子……」
傍から見ると、ヒロのアリアに対する行動は、どう見ても恋人として扱っているようにしか見えないが、アリアにしてみれば一緒に暮らし始めてからずっと、冗談交じりにそんな扱いを受けていた為、兄妹の枠を出た行動とは思っていなかった。
アリアは、理解できていなかった。

10・穏やかな夜

その夜、ヒロから連絡が来たのは二十一時をとうに過ぎてからだった。
告げられた待ち合わせの場所は、三・六街にある光屋（こうや）と言うカクテルバーだった。
目的のビル前でタクシーを降りると、雪こそ降っていなかったが、冷たい風が頬を刺すように吹いていた。
かなり寒く感じられたが、土曜日ということもあり飲み屋街は賑わっていた。
ビルの最上階の六階へつき、店のドアを開けると、若いバーテンが、にこやかに迎えてくれた。
「あの、待ち合わせているんですが」
アリアはそう言いながら店の中を見回すと、奥の方でヒロが手をあげた。コートをバーテンダーに預けて、アリアはヒロの隣に座った。
客席は対面式のカウンターと窓に向いたカウンター席、その他に二テーブルほどあり、店は二十人も客が入れば満席になりそうだった。
ヒロがいる席は窓側だったが、そこだけ奥まっており、カウンターからは死角になっていた。
客は十人程が静かに談笑している。ダウンライトと水槽の明かりが、静かで落ち着いた雰囲気を演出していた。
「女の格好で来いと言ったのに」
白い綿のシャツに濃いブラウンのパンツスタイル、いつものサングラスをしてきたアリアを見て、ヒロは顔をしかめた。
「どちらでもいいじゃない」
アリアは柚子の言葉がいくらか引っかかり、女性の姿でヒロに会うことに抵抗があったのだ。
ヒロはバーテンダーに、アリアには甘めのカクテルを、自分にはギムレットを頼んだ。

「……昨日は、ごめんなさい」
「いや、いいんだ。俺も悪いから」
アリアは昨夜言い過ぎたことを後悔し、俯いて謝ると、ヒロは優しく微笑んだ。
アリアはほっとして笑顔になった。
「今までの時間、何をしていたの？」
「仕事だ」
「何の？」
「……」
「教えてくれないの？」
「知ってどうする。それより、ななには夏頃には会わせてやる」
ヒロがぶっきらぼうに言い捨てた。
「どうして夏なの？」
「会わせないわけじゃない、そのくらい待て」
ヒロに威圧的にそう言われると、アリアはいつものようにただ黙るしかなかった。
窓から見えるビルの煙突から、寒そうに風になびいている白い煙を眺めた。
今夜はこれ以上、何も聞くことはできない。もう言い争いはしたくない。
アリアは早々に諦めて所在なげに手拭タオルを弄んだ。
二人が気まずい感じで沈黙していると、タイミングよくバーテンダーがカクテルを運んできた。
フレッシュ苺を使用した、鮮やかな赤いフローズンカクテルがアリアの前に置かれた。
蘭の花が挿され、ストローもついていて南国風を思わせるカクテルだった。
「女の子が好みそうだね」
「そうだな」
ヒロは白濁色のギムレットを飲んだ。

「美味しいけれど、アルコールがかなり少ないかな」
カクテルに口をつけ、アリアは少し物足りなさそうな顔をした。
「お子様だからそのくらいでいい」
「またそういうことを言う。もう二十歳を過ぎているのに、いつまでも同じ扱いなんだから」
「大人か、そうは見えないな」
フッとヒロの表情が穏やかになった。
「小馬鹿にしてるでしょ」
「俺がななのところから連れ出した時と、変わりないようだが」
「そんな何年も前と同じわけがないでしょ」
文句を言いながら、アリアはカクテルを飲み干した。
アリアはこんな時のヒロが好きだった。安心して頼り切ってしまえる、優しいヒロ。
いつもこうだったらいいのに。
「次は辛口。えーと、ジンベースで……マティーニ、ドライマティーニにする」
「飲めないからやめておけ」
「飲める」
アリアは駄々っ子のように譲らず、ヒロは苦笑しながら言うとおりに注文した。
「じゃ、ドライマティーニを。ドライベルモットは一滴で、レモンピールは入れなくていい」
「かしこまりました」
「それと……」
ヒロはバーテンダーに、アリアには聞こえないようにもう一つ頼んだ。
「何を頼んだの？」
「内緒、きたらわかる」
少しすると、よく冷えてカクテルグラスに水滴が光っているドライマティーニが運ばれてきた。

「ヒロが頼んだのは？」
「後でくる、先にどうぞ」
ヒロは微笑みながら、楽しそうにアリアをじっと観察している。
アリアはマティーニを少し口に含んだが、辛すぎてむせ込んでしまった。
「これ、マティーニだけど、かなり辛口にしたでしょ！」
「無理をするな、自分に合うものを飲んだらいい」
ヒロは笑いを堪えながら、自分の前にマティーニを寄せた。
「お待たせしました、どうぞ」
バーテンダーがもう一つカクテルを運んできた。
ワイングラスに、濃い琥珀色の液体が入っている。その上には生クリームが注がれて、カクテル・ピンにチェリーを刺したものがグラスに渡して飾ってあった。
「お前にはオリーブは似合わない、エンジェル・チップの甘いチェリーがぴったりだ」
ヒロはそう言って悪戯っぽく微笑んだ。
「明日、東京へ帰ろうと思う」
アリアは何杯目かの甘いカクテルで酔いが回った頃、緊張しながらようやくそう切り出した。
ヒロは少し間をおいてから、寂しそうに、「そうか」とだけ言い、反対もしなかった。
アリアは拍子抜けしてしまった。
ヒロの態度は普段より紳士的で優しかった。というより、なんだか元気がないようにアリアには思えた。
「今夜は楽しかった。久しぶりにゆっくりお前と飲めた……先に帰って寝ていろ、俺はもう少し飲んで帰る」
バーを出てエレベーターで階下へ降りる途中、ヒロは微笑みながらそう言った。五、六杯のカクテルを飲んでいたはずのヒロは、顔色も変わらず、全く酔っていなかった。
「私も一緒に行ってはだめなの？」

「女の子のいる店だ」
ヒロは悪戯っぽくそう言ってアリアをタクシーに乗せた後、一人飲み屋街へ姿を消した。
結局、ヒロからは母親のことを詳しく聞くタイミングを逃してしまった。
だが、今はそれよりも、ヒロの静かに笑みを浮かべた表情が焼きついて、アリアの心に引っかかっていた。
いつもなら、アリアが男の格好でいようが、お構いなしに肩を抱き寄せることなど平気なヒロだが、今夜はアリアに指一本触れることもなかった。
考えすぎだろうか、昼間に何かあったのだろうか……このまま旭川を離れていいのだろうか。
タクシーの中、アリアは酔ってぼうっとしている頭で考えた。
不安げなアリアを乗せたタクシーは、さらさらな雪が降る中、凍ってつるつるな路面を滑るように走り、マンションへと向かった。
その夜、ヒロのことが気になってアリアはベッドに入ってもなかなか眠つけず、本を読みながら帰りを待っていたが、ヒロはとうとう帰宅しなかった
そればかりか、夕方になり旭川空港へ行く時刻になっても、ヒロはアリアの前に現れることはなかった。
アリアは嫌な胸騒ぎがした。
ひょっとして、このままずっとヒロとは会えないのでは……そんな考えまでもが一瞬頭をよぎった。ヒロは自分の携帯電話を持っていない。あとは連絡がくるのを待つしかないのだ。
搭乗手続きを終え、ラウンジで待っている間も、アリアの目はヒロの姿を無意識に探していた。
昨日の昼間、ヒロに何かがあったに違いない。アリアはそう確信していた。
血の繋がりはないが、たった二人の兄妹。家族と呼べる唯一の人だった。

今までも、離れて過ごすことのほうが多かったが、こんなに不安な気持ちになることはなかった。
搭乗のぎりぎりまでヒロを待ったが無駄だった。諦めてゲートに入ろうとした時、アリアの携帯電話が鳴った。
「ヒロ？　どうして帰って来なかったの、今何処にいるの？」
「ヒロじゃなくてごめんなさい、アリアちゃん。連絡するなって言われたけれど、きっと心配していると思って。手短に話すわ、ヒロはちょっと冷静になる時間が必要なの。暫くは会えないけれど、必ずアリアちゃんの所へ帰すから心配しないで」
ハスキーなよく響く声、それはDだった。
「どういうこと？　暫くって」
「夏にはあなたのお母さんに……あっ、ヒロだめよ切らないで」
「D？　もしもし」
ヒロに気づかれ、電話を途中で切られてしまったようだ。
Dが一緒にいる。私には言えなくてもDには相談できることなのか。
アリアはぽっかりと胸に隙間ができたような感じがした。
自分はヒロにとってそれだけの存在なのかと思うと、アリアは急に切なくなってきた。
また置き去りにされた。孤独感がどっしりとアリアの心の中に重く鎮座した。
何処をどう帰ったのか、東京のマンションへ着くと、着替えもせずに、アリアはそのまま眠りについた。

「ねえ、アリア起きて。一体いつ帰ってきたの」
柚子の甲高い声が、アリアの耳元で目覚まし代わりに響いたが、アリアは体を起こさず、目だけ開けた。
「おはよう」
「おはようじゃないわよ、心配していたのに。ヒロはどうしたの？　何かあったの？」
アリアが間の抜けた暢気な挨拶をしたため、柚子は一層キンキン声

でまくし立てた。
アリアは上の空だった。
また、ヒロに置いていかれた。
アリアはベッドに横になったまま、頬づえをついてぼーっとしていた。
「柚子はずっとここにいるよね？」
不意に真剣な表情でアリアは柚子を見つめた。
「どうしたの、急に。……いるわよ？」
「そう。柚子、ありがとう」
そう言って起き上がると、アリアは柚子をぎゅっと抱きしめた。
無性に人恋しかったのだ。
「変なの、照れるじゃない」
柚子は戸惑いながらも小さな子供にするように、アリアの背中を優しく撫ぜた。
「ヒロと何かあったの？」
「少しの間こうしていていい？」
「いいけれど、そこのドアのところで十無と昇が硬直しているわよ」
昨夜のうちに、柚子は十無と昇にアリアが帰ってきたことを連絡していたらしい。
早速、二人そろって来たのだった。
「インターホンを鳴らしたけれど、誰も出てこないから……」
十無はばつが悪そうにぼそぼそとそう言い、横にいた昇も「昨日、帰ってきたって聞いて。その……また来る」と言ってそそくさと帰ってしまった。
「いつもタイミングが悪いんだから。アリアもむやみに抱きついちゃだめよ、また勘違いされたわ」
「でも、人恋しくて」
アリアは寂しそうに呟き、柚子をじっと見つめた。
「アリア、男の格好で……なんだか変な気持ちになっちゃったじゃない。もう、自覚してよね」

柚子は冗談交じりにそう言って離れようとした。顔を少し赤らめて、柚子はリビングへ行ってしまった。
「じゃ、女の格好だったらいいのか」
アリアはわかっていなかった。
昨夜そのまま寝てしまってよれよれになっていた服を着替えてから、アリアはキッチンへ行った。
柚子が濃いミルクティーを淹れてくれた。
甘い香りが、キッチンに漂う。
アリアは食卓椅子に座り、両肘をついて熱々の紅茶を冷ましながらゆっくりと口に含んだ。
体が温まり、アリアは少し落ち着いた。
トーストをセットしている柚子の後姿を、アリアはぼんやり眺めた。
柚子がいてよかった。アリアは心からそう思った。
普通のお母さんは、こんな感じなのだろうか。柚子だったらきっと、いい母親になるだろうな等と、アリアはつい想像してしまった。
ほっとしたところで、アリアは双子のことが気にかかった。
「ところで、刑事さんたち、さっきは何しに来たのかな」
柚子は学校へ行く時間を気にして時計を見ながら、トーストをほおばっていた。
アリアの質問に、柚子は早口で答えた。
「アリアの顔を見に来たんじゃないの？　そう言えば、この前来たときに矢萩孝介の事故は美原博一が関与しているようだと言っていたけれど」
「まだ調べているのか」
「きっとアリアとも何かつながりがあるのではって」
「そこまでわかったのか」
「アリアのことも時間の問題ね」
「昇に矢萩孝介の調査なんて頼まなければよかった」
「ねえ、私とアリアは本当に異母姉妹なの？」
「ヒロからは何も聞けなかった、ただ夏に母に会わせてやるって」

「夏って、今はだめなの？」
「わからない。きっと、その時までヒロにも会えない」
「ヒロは何処にいるの？」
「Dと、一緒にいるようだ」
アリアがポツリと言った。
「ヒロから離れるいい機会じゃない」
「そんなこと言っても、兄妹だから……」
「義理のでしょ、血なんて繋がっていないじゃない。それにヒロは妹だなんて思っていないわ。前にも言ったけれどアリアのこと好きなの。アリアはどう思っているの？」
「好きとかそういうことじゃなくて、大切な人だと思ってる」
「もう、煮え切らないわね。はっきりしないと辛い思いをするわよ、きっと」
「だって、他に言いようがない」
「じゃ、Dと一緒にいるってわかってどんな気持ち？」
「ちょっと、嫌な気持ちだけれど」
「それは、嫉妬でしょう」
「嫉妬？」
その言葉がしっくり来ない気がして、アリアは首をひねった。
「違うなら何よ。あーっ、もうこんな時間。学校に遅れちゃう、じゃあいってきます」
まだ聞きたかったが、柚子は慌てて玄関を飛び出した。
アリアは目で送りながら、まだぼうっとしていた。
「嫉妬……なのかな」
アリアは自分の気持ちがよくわからなかった。

11・氷上の蜜月

Dは困っていた。
「ヒロ、いつまでもあなたのお守りはしていられないわ」
「冷たいなDは。傷ついた俺に少しは優しくしてくれないのか」
「もう充分優しくしたわ。それに、心ここにあらずじゃない、逃避しても解決しないのよ。アリアちゃんと早く仲直りしなさい」
Dはお姉さんのような口調で、ヒロを諭した。
「喧嘩したわけじゃない、俺が勝手にここへ来ただけだ」
「事情はよくわからないけれど、どっちにしても私を愛してもいない男とずるずると一緒に過ごしたくはないの」
昨日、ヒロはDの所へ突然、転がり込んできたのだった。
ヒロは急にDの顔を見たくなったと言っているが、どうやら、旭川でアリアと何かあり、朝まで一人で何件かのバーをはしごして、そのまま朝一番の飛行機で東京へ来たようだった。
「Dは好きだ、綺麗な体だ」
ヒロはベッドから半裸の上半身を起こし、煙草をふかしながらDの着替えを眺めている。
「ありがとう。でも、寝煙草は止めてね。煙草の匂いがつくと嫌だから」
お世辞でも、褒められて悪い気はしなかった。だが、ここで良い顔をしたらヒロがずっと居座ってしまう。
Dは無表情でその言葉を受け流した。
タイトなTシャツとジーンズに着替え終えたDは、寝室を出た。
「きつい奴だな、寝ているときは可愛いのに……と、女王様の機嫌を損ねると大変だ。美味しい朝食でも作るとするか」
ヒロはシャツをはおり、慌ててキッチンへ行った。

「ご機嫌とっても無駄よ、朝食が終わったら帰って」
Dは食卓でもヒロを冷たく突き放した。
「これ美味いだろ。紅茶はもう一杯どうだ？」
確かに、ヒロが作ったフレンチトーストはバケットを使い、バターで程よく焼けており、おまけにシナモンを少しまぶし、食欲のそそる香りがして美味しかった。
何よりも、直ぐ側で微笑みかけてくれる相手がいるということが、Dの気持ちを和ませた。
「お茶はもらうわ。……別に作ってなんて頼んじゃいないけれど」
「美味しいって言ってくれてもいいのに、素直じゃないな」
「そういう性格なの。ヒロ、ジゴロじゃないんだから、ここにいては駄目」
Dは始終冷徹な態度を崩さなかった。
「ジゴロね、いいねぇそれ。俺は結構まめだぜ。料理も好きだ」
「ちょっとそれってジゴロとは違う気がするけれど？」
Dはつい、ヒロのペースに乗り、くすっと笑ってしまった。
「笑った顔の方が好きだな」
「タラシなんだから」
Dは怒ったようにそう言いながらも、顔は赤く、それを隠すように俯くと、サラダをフォークでつついた。
「可愛いね、水香（みずか）」
ヒロはDの座っている背後に立ち、紅茶を注ぎ足しながら、Dの長い髪をもう片方の手で弄び、髪に唇をつけた。
騙されてはいけない。ヒロはどうしようもないくらい、アリアちゃんが好き。今はただ寂しくてここへ来ただけ。
ヒロの仕草に、体が火照るのを感じながら、頭の中でそう否定したが、Dは拒みきれなかった。
「勝手に呼び捨てにしないでくれる？　あーもう、わかったわよ、降参。いてもいいわ、好きにしなさい。でも過剰なサービスは要らないわ」

髪に触っているヒロの手を、うっとおしそうに払いのけ、断りきれない自分に少し苛立ち、Dはため息をついた。
「ありがとう、ホームレスにならずに済んだ」
そう言って、素早くDの頬にキスをした。
「但し、一ヵ月以上は駄目」
「情がうつるから？」
「そう、ね」
「俺、野良猫みたいだな」
「それで充分じゃない」
「……今夜も一緒のベッドがいいな」
ヒロは背後からDを抱きしめ、耳元で囁いた。
「猫はクッションの上。それとも外で番犬のほうがいい？」
ヒロの甘い囁きをかき消すように強い口調で、Dは玄関を指差した。
「いえ、猫でいいです。何なりとどうぞ、あなたの下僕です女王様」
ヒロはおどけて両手を上にあげ、ホールドアップのポーズをした。
「あなたマゾ？」
「Dのお好みにあわせます」
「変な男」
「君には負ける」
ヒロはウインクした。
二人はお互いの顔を見合わせると微笑んだ。
そうして、ヒロは『仕事』のサポートも勿論難なくこなし、文字通り二十四時間Dに徹底して尽くした。そうすることで何かを忘れ去ろうとしているようだった。
その間、アリアの元へ帰ろうとしない理由を、Dはあえて訊こうとはしなかった。
時々寂しそうな表情をするヒロに、訊けばこの生活が壊れてしまいそうだった。
一枚の薄い氷の膜の上に築かれた緊張感のある生活、長く続かないとわかっているこの蜜月を、Dは楽しんだ。

一ヵ月は瞬く間に過ぎ、結局蜜月はずるずると夏まで続くことになったのだった。

12・心の支え

アリアの生活は、柚子がいなくなる前の穏やかな日々に戻ったように見えた。
だが、アリアの心中には少なからずさざ波が立っていた。
昇は旭川から帰ってきて以来、朝食を横取りしに来なくなり、アリアと会っても態度がよそよそしく、アリアは少し寂しく感じていた。
おまけに、ヒロからは全く連絡のない状態が続き、気になって落ち着かなかった。
そして、柚子の言葉がずっと喉に引っかかっていた。
『それは、嫉妬じゃないの？』
そんなふうに微塵も思っていなかったアリアには、衝撃発言だった。
血は繋がっていなくても家族だから、兄妹なのだから当たり前なのだと、アリアは思い続けていた。
ヒロの行き過ぎた愛情表現を、アリアは兄妹の枠を越えているとは思っていなかった。いや、今まで思わないようにしていたのだ。
だが、柚子に指摘されてアリアは気づいてしまった。ヒロに甘えて気持ちをもてあそび、利用していたのは自分のほうではないかと。
アリアはそんなことを考えては、頭の中でまた打ち消すことを繰り返していた。
「また今日も一日中そうやってヒロのことを考えていたでしょ。いいかげんしゃんとしてよね、ヒロなんて傍にいないほうがアリアにはいいの」
アリアがソファに横になって昼間からジンライムを飲んでいると、学校から帰宅した柚子が、開口一番うんざりしたようにそう言った。
「柚子にはわからない」
「わかりませんよ、わかりたくもないわ」
「ヒロは唯一の家族、二人で生きてきたんだ」
アリアはソファから起き上がり、ジンライムをがぶりと勢いよく飲

んだ。
「そうですか、じゃあ私は一体何よ」
隣に座った柚子は、アリアの手元からグラスを横取りしてごくんと飲んだ。
「こら、未成年が飲んじゃ駄目」
「飲みたくもなるわ」
柚子はキッとアリアを睨んだ。
「あ、ごめん。柚子は多分、妹だから家族だね」
はっとしてアリアは慌てて訂正し、そっと柚子からグラスを取り戻した。
「で、私が急にいなくなったときもそんなに苛々した？」
「苛々なんてしていない。今だって」
「そう？」
「ただ心配なだけ。柚子が急にいなくなったときもすごく心配で、不安だった」
「不安？」
「私は必要とされていないのかなって」
「アリアって寂しがり屋なのね」
「そうかな。一人でいるのは平気だけれど」
「その感じわかる気がするけれど、頼る相手を間違えていると思う」
「ヒロを頼っているつもりはないけれど……」
「自覚していないのね。十無や昇はどうなの。そのほうがずっといいと思うけれど」
「今は柚子がいて少し落ち着いていられる、それでいい」
そう言って、アリアは柚子にもたれかかった。
「私は別でしょう？　私が言っているのは、彼氏のことで……もういいわ。アリアにそんな話し無理かもね」
柚子が呆れたようにそう言いながらも、悪い気はしていないようだった。
アリアは何も考えたくなかった。

「よお、アリア」
昼下がり、昇がやや緊張した面持ちで、マンションを訪ねてきた。
最後に会ってから三週間ほど経っていた。
「何か用事があるの？」
玄関先に出たアリアは、女性の姿で落ち着いた感じの紺色のスーツを着ていた。
「用っていうほどじゃないけれど……これから出かけるのか？」
別人のように見えるアリアの姿に、昇は視線を合わせない。少し戸惑っているようだった。
「柚子の学校で面談だ。来なくていいといわれたけれど、そうもいかないからね」
「おいおい、その言葉遣い、何とかしろ」
外見と言葉遣いがちぐはぐで、昇が吹き出した。
「学校ではうまくやるから良いんだ」
アリアはむっとした。
「車で送ってやる。少し話したいことがあるから」
「そう、ありがとう」
アリアは何かあるのではと疑ったが、素直にお礼を言った。
髪をアップにしてまとめ、出かける用意を終えたアリアが、昇の車に乗り込んだ。
微かに化粧の香りが、昇の鼻をかすめた。
「ＯＬか秘書って感じだな」
昇がハンドルを握りながら、助手席に座っているアリアをちらりと見た。
「ちょっと堅苦しい感じがするかな、変だろうか」
「いや、変じゃないけれど……お前、女にしか見えない。本当に男か」
昇の視線は、アリアの細い首筋辺りにいっている。
「お褒めの言葉、ありがとう。で、話しって何？」

アリアはそんなことどうでもいいというように、さらりと受け流した。
「ここの所ずっと調べていた。柚子のこと、おまえのこと」
「で、何かわかった？」
動じずにアリアは淡々と訊いた。
「いや、正直言ってさっぱりだ。ただ、柚子の父親の矢萩孝介は事故死ではない」
「柚子もそう言っていたけれど」
「矢萩を下請けとして使っていた美原博一が何か絡んでいるようだが、動機がわからなかった。だが、少しつながりを見つけた。ななと言う女だ」
その名前を昇が口にした時、アリアは一瞬青ざめた。
「どうかしたのか」
「いいや、別に。それで、その女がどうかしたの」
「美原は以前、ななと短期間だが結婚していた。そして、二人は突然離婚し、ななは矢萩孝介と同棲し、再婚する直前に矢萩が事故死している。逮捕暦はないが、どうやらななは結婚詐欺師だったようだ。そして、ななは何故かまた美原と復縁している」
「よく調べたね」
「知っていたような言い方だな」
運転している昇は、アリアの表情を観察しようとしているようだった。アリアは窓の方を向いて動揺を悟られないようにした。
「で、美原が何かしたという証拠でも掴めた？」
「いや、残念ながら。かなり古い事故だから立証するのは難しいだろう。でも動機はわかった。多分、ななが矢萩と不倫関係になったことに腹を立て、美原が何か車に細工をしたんだろう。あるいは、そこまでしなかったとしても、毎夜のように仕事だといって呼びつけ、遅くまで接待させていたことを考えれば、過労になるよう追い詰めて、死に至らしめたのだと推測できる」
「……」

美原博一が柚子の父、矢萩孝介を死に追いやったのだろうと、アリアはなんとなく予想していたのだが、改めて聞くと、胸が締め付けられた。
柚子にこの辛い事実を話せるだろうか。
「それでだ、美原には前妻との息子がいる。行方不明らしいが……他にななとの間にも一人子供がいた。その子は離婚時にななが引き取ったが、その子も現在、行方不明ということだ」
そこまで話し、昇は車を歩道に寄せてとめた。
窓の方をずっと向いていたアリアは突然両肩を掴まれ、昇の方に無理に向かせられた。
「その子は『そうちゃん』と呼ばれていたらしい。名前からすると男の子だが、よくわからない。おかしな話しだが、その子は周囲の人の記憶にほとんどなく、影が薄い」
「……」
「美原の息子と言うのはヒロのことじゃないのか？　本名は美原弘文。そしてもう一人の行方不明の子供はお前だろう、アリア」
「痛い、手を離して」
「答えろ、どうなんだ」
「違う。何でも都合よくこじつけないで。学校に遅れるから、早く車を出して」
「俺はお前が男だろうと……でも、女であったらと……ごめん訳のわからないことを」
悲しげなアリアの表情を見て、昇は動揺し、肩から手を放した。
昇は黙って車を発進させた。
重い沈黙のまま、柚子の学校に到着したのだった。

13・柚子がいる眠れない夜

「柚子さんは成績もよく、責任感もありとても優秀ですよ。だた、進学はしないと言っています無駄だから、と」
担任の先生から聞いた評価は、かなり良いものだった。時々休んでいることも、体が弱いための病欠となっていた。
面談はさほど時間もかからず終了し、柚子とアリアはタクシーで一緒に帰宅した。
もっともアリアは、昇に素性を問いただされて動揺し、先生の話は半分ほどしか聞こえていなかったのだが。
「さて、夕飯の支度しようかな」
柚子は鼻歌交じりで、私服に着替えてキッチンへ行こうとした。
「柚子、少し話しがあるからここへおいで」
アリアは窮屈な変装をといていつもの服装に戻ると、少し大人の顔をして言った。
「なに？　改まって」
柚子はアリアと向かい合わせにソファに座った。
「進学しないって、何の職につこうと考えているの？」
「前に言ったじゃない、泥棒になるの」
「それは職業じゃない」
「アリアにそんなこと言われる筋合いじゃないわ、だから学校に来なくていいって言ったのに」
柚子がふくれっつらで面白くなさそうにしている。
「今は家族だから、私にも関係はある」
柚子が黙ってしまった。
「じゃあ一歩譲って……大学に行っても泥棒はできる」
「何を学ぶのよ」
「何でも知っていた方がいい、きっと総てが役に立つ」
「そうかしら」

あまり納得していないような返事だ。
「まだ時間はあるから、よく考えて」
「わかった、一応は考える」
そういい残して、さっさとキッチンへ行ってしまった。
「この環境、よくないな」
アリアは小さくため息をついた。昇から聞いた話もしようと思ったのだが、機会を逸してしまった。
突然、アリアの携帯電話が鳴り、心臓が高鳴った。
ヒロからだ！
「ヒロ？」
携帯電話に向かって、恐る恐る名前を声に出してみた。
「ああ、元気か」
「うん」
携帯電話からいつもと変わらない声が聞こえてくると、目頭が熱くなり、アリアは自然と涙が溢れそうになった。
「もう連絡はないと思っていた」
「馬鹿だな、今までだって一ヵ月位連絡しなかったことはよくあったじゃないか」
「でも、電話を途中で切ったから」
「ごめん、俺も色々あって……アリア泣いているのか？」
「……」
「七月に旭川のマンションで会おう、ななにも」
「母さんにも？　それまでDのところにいるの？」
「いや、わからない」
「何があったの」
「今は言えない」
「Dには言っても私には駄目なの？」
「あいつにも何も言っていない」
「うそ」
「じゃ、七月が近くなったらまた連絡するからそれまで待て……俺

の、気持ちの整理が必要だ」
「どういうことかわからないよ」
「いいんだ、わからなくて。じゃあな」
ヒロはそういい残し、電話を切った。
会うことは約束できたが、ヒロに突き放されたようで、アリアの心の中には不安と孤独が入り混じり、混沌としたのだった。
「どうしたの？　アリア」
キッチンから顔を出した柚子が、ソファに座って両手で膝を抱え、顔を伏せているアリアに驚いた。
「ヒロから連絡があった」
アリアは俯いた姿勢のまま呟いた。
「泣いていたの？」
「自分でもわからないけれど泣きたい気分」
「さっきまで、保護者ぶっていたくせに。保護者がいるのはアリアのほうかも」
柚子は冗談交じりにそう言いながら、アリアの傍へかがんだ。
「そうかもしれない、私の方がいつも柚子を頼っている」
アリアは少し顔をあげ、涙をためた瞳で柚子を見つめ、弱々しく言った。
「すぐ人を頼って、一人では生きて行けない」
「真面目に取らないでよ、冗談だから。それに一人で生きていける人なんていないわ、必ず誰かが支えてくれているの」
「柚子がそんな風に考えているなんて意外だな」
アリアに笑みが浮かんだ。
「どういう意味よ」
「いかにも一人で生きていますって感じに見えるから」
「私はそんなに強くはないわ。私もアリアを安定剤にしているのよ」
「そっか」
「そうよ」
二人は顔を見合わせ、くすっと笑った。

まだ十代なのに、しっかりした考えを持ち、冷静に自分をわかっている柚子は、きっと、人一倍苦労してきたに違いない。
自分ももっとしっかりしなくてはと、アリアは思った。
ヒロは冬の旭川で何かあったに違いない。ヒロが落ち込んでしまう何かが。
自分の父が誰なのか、七月に母から訊きだす。そして、過去をすっきりさせて、ヒロの支えになれるくらい大人になろう。
アリアは柚子と話して気持ちが軽くなったのだった。
旭川へ行く七月までの間、アリアと柚子は適度に仕事、泥棒とスリ……に精を出し、あまり顔を出さなかった十無刑事を悩ませた。
それでもアリアは、ヒロと自分の関係がこの先どうなってしまうのかと不安で眠れなくなる夜もあったが、そういう時にはいつも柚子がそっと傍にいてくれた。
それだけで気持ちが落ち着いた。
眠れない夜は、アリアにとって辛いものではなくなったのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2202a/

地方都市物語・２・眠れない夜（冬・旭川へ）

2011年6月14日01時06分発行